

山梨県大月市

宮谷遺跡発掘調査報告

昭和47年度

大月市教育委員会

卷頭言

大月市長 志村 寛

原点に戻れという言葉がある。今の社会は情報化社会といわれ数々の情報が入り混じり複雑な社会構造をなしている。各人は何時もその情報の選択を余儀なくされ、その取捨によって本人の人生は勿論社会や人類の将来を左右される。現在即ち今の社会程この賢明な選択を要求されることは歴史の上に於ても皆無のものであろう。昔は百年の大計といわれたが今では十年の大計さえ至難との声まで挙る程社会は日まぐるしく転回している。世の中が混沌し、その帰趣に迷う時必要なものは、この原点に戻ることである。それは人間発生、誕生の悠久の過去を振り返ることが必要である。それはパラビテクスやホモサピエンスの大古でなくてもよい。われわれの手の届く縄文時代でもよい。その意味に於て市内には数々の先史、原始時代遺跡の確認が文化財審議委員らの手によって明らかにされ、とりわけ富浜町宮谷は最もその密度の高い地域と答申されている。

市に於ては、さきに市史の編集を手がけ今回教育委員会の企画によって、宮谷白山遺跡の発掘調査に全面的に力を注ぐことにした。その成果を社会教育や学校教育に大いに反映してもらい、又縄文人の生活を振り返り、明日への洞察を行ってもらひ人類社会発展への足がかりと致したい所存である。

この事業に当り文化財保護協会、県などの力をいただき、宮谷遺跡調査会が発足し、調査団が結成され、調査が成功裡に終ったことに対し関係各位の協力と理解に対し深甚の感謝の意を表します。

刊行のことば

大月市教育委員会

教育長 藤本三郎

本市に於ける文化財の研究は率直に云って先進的な活動がされて居なかつたのが現状であった。むしろ、その活動は一部の同好の人達によってのみなされ市井ではその存在は認められて居なかつたのではないかと思う。

それが宮谷白山遺跡の発掘調査により一躍脚光を浴びるに至つて急激に文化財熱、特に埋蔵文化財に対する関心が高まって来ている。その意味では今回の発掘調査は一つのカンフル剤になったと云える。

この報告書がようやく発刊のはこびになつたけれど住居が復元された今日思えばここまでよくやつたものだと思う。発掘を直接担当してくださつた川崎先生を始め関係各位に対し改めてお礼を申上げたい。特に県教委、市文化財審議会委員、及び地元の人達には多大のご指導ご援助を受けた。

真夏の太陽のもとで上工顔負けに力強くスコップをふるい、又宝物を探すように竹べらを使う高校生などの発掘者の作業のさまが今更の様に思い出される。その中の住居跡発見の時の感激は又ひとしおであった。幾千年前の私達の祖先がこの地にあって、野山をかけめぐり、鳥や獸を捕え生活をしていたであろう様子が生き生きと浮き彫りされて来る。

住居跡の奥から入口に向つて見ると一直線上に富士山がながめられ、当時の人々の信仰の中に当時は火を噴いていたであろう富士山が多くを占めていたことが推測出来る。その当時からわが大月市は風光明媚なところであり好んで彼等が生活して來たのである。

こうして幾千年前間に築き上げられた大月市の歴史をつきとめ、市民生活の向上と将来の發展に役立てるよう遺跡に対する意識の高揚を期待してやまない。又そのことが現代に生きる私達の義務でもあろう。

どうか休日などはこの遺跡をたずねて欲しい。そして可愛がつて欲しいと思う。私達自身の又、私達に続く者達の學習の生きた教材になるようお互に努力しよう。

以上中述べ本報告書の刊行のことばにかえる。

例　　言

1. 本書は、大月市教育委員会が、行なった大月市富浜町宮谷白山、古谷金山両遺跡の発掘報告である。
2. 発掘調査は、大月市教育委員会が、小林達雄（東京都文化財技師）に委託したものであり、同氏と川崎義雄（東京都文化財総合調査員）が担当した。
3. 発掘調査には、主として県立都留高校、市立大月類人付属高校の両校生徒が中心となった。
4. 出土品の整理は、担当者の指導で発掘参加者が行なった。
5. 本書の報告の執筆者は、文末に記した。
6. 本書の編集は、川崎義雄、重住豊および教育委員会事務局があたった。
7. 発掘調査および整理参加者は、報告書の巻末に記した。

目 次

卷頭言

例 言

第1章	はじめに（発掘までの経緯）	7頁
第2章	宮谷地区の調査	8頁
第3章	宮谷の自然環境	12頁
第4章	宮谷白山遺跡の発掘調査	16頁
1.	発掘の経過	16頁
2.	層 位	18頁
3.	遺 構（住居跡）	20頁
4.	出土遺物	22頁
A.	上 器	22頁
B.	石 器	27頁
C.	ク ル ミ	29頁
5.	参考資料	30頁
6.	ま と め	31頁
第5章	宮谷金山遺跡の発掘調査	34頁
1.	発掘の経過	34頁
2.	層 位	34頁
3.	遺 構（土塙）	35頁
4.	出土遺物	36頁
	上 器	36頁
5.	ま と め	37頁
第6章	おわりに	38頁
第7章	参考文献	39頁
第8章	発掘に参加して	40頁
	あとがき	42頁

図 版 目 次

図版 1	遺跡の遠景・近景	43 頁
2	土器の出土状態・石臼炉	44 頁
3	測量風景・うめもどし風景	45 頁
4	石臼炉と石棒の復元・住居跡全景	46 頁
5	宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器とクルミの実	47 頁
6	宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器	48 頁
7	宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器	49 頁
8	宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器	50 頁
9	宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器	51 頁
10	宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器	52 頁
11	宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器	53 頁
12	宮谷白山遺跡出土の石器	54 頁
13	宮谷白山遺跡の出土石器と石井徳重氏所蔵の土器	55 頁
14	宮谷金山遺跡の上塙と土器の出土状態	56 頁
15	宮谷金山遺跡出土の後期縄文土器	57 頁
16	宮谷金山遺跡採集の縄文土器(幡野氏所蔵)	58 頁
17	宮谷金山遺跡採集の縄文土器(幡野氏所蔵)	59 頁
18	宮谷金山遺跡採集の縄文土器(幡野氏所蔵)	60 頁
19	宮谷金山遺跡採集の縄文土器(幡野氏所蔵)	61 頁
20	宮谷金山遺跡採集の縄文土器と石器(幡野氏所蔵)	62 頁
21	宮谷金山遺跡採集の石器(幡野氏所蔵)	63 頁
22	宮谷金山遺跡採集の石器(幡野氏所蔵)	64 頁
23	宮谷金山遺跡採集の石器(幡野氏所蔵)	65 頁

挿 図 目 次

第1図	遺跡付近の地形	14頁
第2図	遺跡付近の断面図	15頁
第3図	遺跡地形図と発掘区	18頁
第4図	住居跡と遺物の原位置	19頁
第5図	豎穴住居跡実測図	21頁
第6図	出土土器	23頁
第7図	出土土器	24頁
第8図	出土土器	25頁
第9図	出土土器	26頁
第10図	出土石器	28頁
第11図	出土石器	29頁
第12図	石井徳重氏所蔵の上器	30頁
第13図	石皿実測図	30頁
第14図	土埴実測図	35頁
第15図	出土上器	36頁
付表1	各対比表	12頁
付表2	関東ローム層の年代区分	13頁

第Ⅰ章 はじめに

宮谷白山遺跡の住居が復元して、この復元住居が、山梨県で唯一のものであったことを自慢し、この事業を興したことによって、地域の、広くは県内の埋蔵文化財に関する認識が高まった成果を自認しながら、発掘した当時の状況を思い出してみたい。

勿論、この事業は、市の教育委員会、市文化財審議会の力ではない。未知の事業に当たった多くの人々の情熱がこの成果を収めたのである。特に直接指導に当られた小林、川崎、重住、塙野先生にはお礼の申しようがない。加えて、県社会教育課の適切なご指導、地元宮谷の人達、および都留、大月両高校の生徒諸君などの協力があって、この遺跡が世に出たのである。

さて、ことの発端は昨年の3月、石井徳重氏が、市文化財審議会会长の佐藤威夫先生に、畑を耕していたところ跡跡、瓶らしいものが出てきたからと連絡したことに始まる。この話は佐藤先生から文化財審議会の席に出されたのであるが、その時の市教委には予算、人材がないので心配があった。しかしながら、住居跡らしいことが確認できたことは、発掘の成功率が高いこと、本市初めての事業であることも調査の必要性を増した。それに、近い将来、中央自動車道の建設予定地の発掘調査が予定され、これのリハーサルという考え方からも、実施しなければならない条件が重なっていて、このことを文化財審議会の委員の中から強くいわれたのである。

幸いにして、この話を市当局へ持っていたところ、温かいご理解を得、すぐ予算化することが出来たし、また、発掘担当者についても、小林、川崎先生にお願いすることが出来た。予算がない、人材がないという悪い条件は取り除かれたわけである。調査の計画は、文化財審議会においてされた。その中で、次のような調査団の編成がつくられた。

宮谷白山遺跡発掘調査団

團長	大沢良作（市教育委員長）
副團長	藤本三郎（市教育長）
調査部長	小林達雄（東京都教委文化課埋蔵文化財専門職員）（當時）
調査副部長	川崎義雄（日本考古学協会々員）
	金田頼貞（市文化財審議会委員）
理事	（市文化財審議会委員）
	佐藤威夫・石井 深・佐藤輝光・大野四郎
	小林利久・小林 岳・小保孝則・中村嘉子
調査員	都留文化大学生・都留高校・大月短大付属高校生徒

調査は7月24日からの炎天下で行なわれたのであるが、竹ベラで掘りながら、住居跡の輪郭が出てきた時の興奮は、今も手の中に残っている。直接発掘に当ることのできた幸運を、共に喜びたいと思う。と同時に先人の残した貴重な文化遺産を、後世に残すことは、現代に生きるわれわれに果せられた義務なのである。

（大沢良作）

第2章 宮谷地区の調査史

(宮谷遺跡発掘までの歩み)

宮谷地区は、遺跡が多く、付近の人々に早くから、その存在が知られていた。また、御神体、およびそれに準ずるものとして、石棒、石斧、敲石、土師器片、縄文式土器片などが、付近の神社、道祖神などに納められ、出土した遺物を神聖視していた。

人々が「先住民」という呼称で、原始人の存在を知り、石器や土器がその遺物であることを認識したのは、1920年以来のことと思われる。それは、仁科義男氏が考古学徒として、調査活動を始めた頃で、同氏の影響と思われる。やがて、仁科氏に積極的な協力者、同調者があらわれた。宮谷の幡野氏、葛野の土屋氏、駒橋の駒形氏、初狩の吉田氏らである。

しかし、この頃の「先住民」という概念もあいまいで、今日の日本人とは全くかかわり合いのない「野蛮人」、「未開人」と考えていた。つまり遺物は、はじめ「コロボックル」が、その後「アイヌ」が用いていたものとみなし、一時は、遺物を汚物視する誤った傾向がみられた。このため、多くの遺構が破壊され、遺物は放棄され、あるいは一部の好事家の手で骨董品に準じて売買された。これらは、当時の風潮が反映して民族の純粹性、優秀性が過剰に強調されたことに起因している。

仁科氏による宮谷地区の調査は、1929年、史跡名勝天然記念物保存協会の「史跡名勝天然記念物」第4集・第3号、および1931年、山梨県北都留郡連合教育会の「郷土の遺跡」、1935年の「甲斐志料集成」第12巻収録の「甲斐の先史並原始時代の調査」などに総括されている。これらによると、宮谷地区の遺跡、遺物は次の如くである。

宮谷の東平811番地付近を「遺物散布地」として、「縄文式及弥生式遺物」の存在を認め、長さ、南北4.24m、巾、東西1.55m、自然石を床に敷いた「横穴式石棺」として観察、鉄鎌、鉄釘、鉄板片などの副葬品を得、石棺の材石の転用による、遺構の攪乱を記し、ここを「金山古墳」と呼称している。また、地点は不明確であるが「下方一番の畑地」を「史前遺物の散布地」、「陥落せる横穴式古墳」、および、宮ノ腰、万台の付近を「遺跡」、あるいは「遺物散布地」と称しているが、詳細ははぶかれている。

仁科氏調査の頃、同地の幡野氏は、811番地付近で、こぶし大の鉄滓を大小10数個採集している。これらは、前記の鉄製品とともに、この付近において、溶鉄が行なわれたことを示す資料である。

1935年から、1945年の間、ほとんど終息状態にあった当地の考古学は、10年余にわたる傷手が大きかっただけに、その再生、再燃は遅かったが、1962年、県が国の補助金を受けて行なった企画的な埋蔵文化財包蔵地調査が始まる。当市では、金田賴貞氏がこれに当り、宮谷地区では、前述の811番地のほか、850番、854番の両所が「遺物散布地」として付加えられた。これらは、1964年、山梨県教育委員会刊行の「山梨県遺跡地名表」、ならびに1966年、文化財保護委員会が作成した「全国遺跡地図」(山梨県)に収録されている。この調査は画期的なもので、全国、全県が一齊に調査を行ったことの意義は大きい。しかし、前者の「」の如く「有効適切に利用」できる、また「遺跡が保護されるよう」な、

政治的、社会的な対策に欠けていたため、その成果は充分生かされていたか、どうかは疑問である。結果としては、行政発掘が優先し、全般としては、学術発掘といわれるものはほとんどなく、これに準ずる調査も、ささやかな個人の犠牲的奉仕によること僅かであった。

1965年、日本道路公团により、山梨県中央自動車道建設対策本部が設けられ、通過予定地の埋蔵文化財包蔵地調査のための調査団が組織された。そして宮谷の調査は、山本寿々雄氏を中心として行なわれた。この調査により、内原、若宮、上山王、下山王の各所に埋蔵文化財包蔵地を発見したが、1966年1月の発掘の主力は、内原におかれた。その結果は、同年3月発行の同所発掘調査概報に詳しいが、1968年、同氏による「山梨の考古学」(吉川弘文館)に総括されている。それによると、「宮谷石器文化の文化層は、上部赤色スコリア質ロームの中に、あって『縄文式最古の上器』として、爪形文土器、押圧縄文を有する土器や、『併出する石器群』を得、細石核、および細石刃関係の遺物は認められないが、宮谷に、特異な先縄文文化の存在を確認したと報告している。この発掘で注意すべきは、発掘に並行して行なわれた甲府盆地第四紀研究会による、付近の地層、地質、岩石の調査である。層序と遺物の関係を研究する上、考古学とその隣接科学が協力したことは、新しい方法を地域に示したものとしてその意義は大きい。ただし、山本氏らの発掘調査には、この方法を充分に生かされなかった恨みもあり、多くの問題点を残している。しかし、これらは大局的にみて、山本氏自からなげく行政発掘の限界点と矛盾を示すものであろう。

山本氏らの調査が終ってから約1ヶ月後、井尻正二、大森昌衛、小林達雄の3氏を中心としたグループが訪れた。文字通り隣接科学との共同作業であった。そして地元から、輪野薫、山本正雄、枝俊章、鈴木武雄、そして筆者らがこれに参加した。発掘地点は、山本氏らの発掘地点の東南に接する内原で、約500mである。折からの小雨で悪条件が重なったのにもかかわらず一定の成果を得た。まず出土した遺物については、擾乱のため完全なものではなく、量的にも山本氏らの発掘と大差はない。異なるのは、神山型グレーパーと、宮谷型ともいるべき、宮谷独特の個性をもった撲糸紋系土器片の発見である。山本氏らの調査と合せると、次の如き結論が得られよう。

宮谷には、現在のところ弥生式文化の存在は認めがたいが、無土器文化、縄文文化の各期の文化、古墳文化、そして歴史時代に入るまでの各時代の文化が断続的に存在した。そしてこれらは、この後の白山遺跡の調査により補強されるのであるが、宮谷は南関東系の文化を基礎に、北越系、中部系の諸文化が重複し、それに宮谷独自の個性を備えている文化といえよう。

この調査団は、発掘調査の成果のほか、考古学における発掘調査は、調査団のためでなく、国民全体、それも何世代も重なる子孫を含めた大衆に奉仕するものでなくてはならない、ということを前提に、現在における考古学の使命、特に歴史学、地学をはじめとする諸科学とも共通する、科学的方法論の意義を、実践を通して教えられたことであれわれにとって背天翁懸の衝撃であった。

また、この調査団は、発掘した遺物を全部現地に残し、大月市民による研究体制の発展を期待した。この直後、地元の宮谷、猿橋を中心として秩川第四紀研究会が生れた。この研究会は山本、鈴木氏らが中心になり、第四紀の総合的な研究をテーマとした。そして1967年7月に和島誠一氏を招いて、臨地研究会などを行って近接地域の研究会と交流をもち、その質的向上もはかった。

会員を初めとする関係者、および付近の住民に与えた影響は深く、今回の発掘に際し、地域民の意識の中心的役割りを果し、新たなる研究組織を再建する母体となっている。

そこで、今回の発掘調査と過去に行なわれた諸調査との相違点、問題点などについて記してみたい。

1. 発掘の動機と性格　今までの発掘のほとんどは、行政発掘、ならびにこれに準ずるものであって、発掘面積、発掘期間は、当然のことながら事業計画の域を出ず、遺物などの出土は、事業主、施工者にとって迷惑とされることが多かった。また、調査者自身においても遺物だけに注意が集中していたため、遺構、遺跡はほとんど無視される結果を招いた。

また、大規模な破壊を前提とするため、施工者、土地買収者より、発掘、調査、研究費などが多額に提供される。このため、経済的、人格的にも開発計画に規制される。「調査をしないで遺跡が破壊されるより、調査ができるのでよかろう。」という理論が生まれる。さらには行政発掘による技術の変革をもたらすことはあっても、これらはやがて行政発掘主義に変り、それに見合った方法論、つまり「考古学とは、遺物学、遺跡学である」という発掘学が横行する傾向が生れる。

このような状況の中で、決して理想的とはいえないが、行政に拘束されない方式によって宮谷を発掘したことの意義は大きい。

2. 調査団の組織　大月市教育委員会を中心となり、大月市文化財審議委員会、大月市郷土研究会、都留高校社会部、大月短大付属高校インターネットクラブ、および地元有志を加え、調査団が組織された。もとより素人ばかりであるが、調査団が迎えた3名の専門調査員は別として、ほとんどが大月市民による編成である。「われわれの手で、われわれの土地を調査するのだ。」という意識は、全体の責任感を強くし、発掘作業の雰囲気に反映、かつ発掘の過程を見守る市民に大きな影響を与えた。それは「考古学とは何か」「発掘とは何か」「郷土とは何か」「市民の郷土史とは何か」という課題の存在を意識する機会となり、自己の生活している地点とその周辺を科学的に分析し、認識するための出発点となった。つまり、調査団の組織構成の性格は、その体制の問題をはるかに越え、関係者の意識を、量的、質的にたかめたのである。

3. 調査方法　発掘調査の対象となるべき土地をあらかじめ調査しておくことは当然のことである。しかもその予備調査の結果を、さらに本調査における予算見積までプリントにして、調査団ならびに関係者全体に配布すること、かつその計画に対する参加者の理解を深める努力を行なうばかりでなく、積極的に研究と批判の行なえる場を作ることは、極めて有益である。しかも僅かの手間を惜しまないならば、必ずしもしうるところのものである。しかし、過去において、これがなされなかつたのはどうしたことであろう。

宮谷および、その周辺の地形、地状、遺跡としての発掘地点の分析、グリッド方式とトレンチ方式の比較をする中で、グリッド方式をとる意義を明確にし、発掘作業の各段階と任務分担を参加者全員に徹底させた。また、この予備調査は、性格の異った付近の岩殿遺跡と同時に行なわれただけに効果的であった。

4. 総括　発掘作業の最終日、宮谷小学校において、報告会、反省会、つまり総括が行なわれた。この会には発掘参加者のほとんど全員と、宮谷地区の代表者が参集、それぞれの立場

において報告、所感が発表された。文字通り市民の意見、希望を真に反映し、その盛り上りの中で、復原家屋建設の決議が全員一致で採決された。この総括会ほど、発掘調査、あるいは発見された住居跡の意義が実感をもって参会者に受けとめられたことはなかった。

5. 調査員の参加者に対する指導 一般的に、専門家や研究者に委せる発掘が多く、また、それらの人々も請負的になりがちである。しかし、今回、調査員は、後学の育成、地域全体の敬愛という感觉、視点にたってこれにあたった。つまり、作業時間中連任者、希望に対して方式、方法、技術に対する説明、また測量、測定方法の実習を行なったり、白山遺跡の意義を、宮谷全城に分布する遺跡群、あるいは、宮谷以外の周辺遺跡と比較、解説してゆくという指導を行なった。これらは、一つには過去の、とくに1955年以前の方法、史観に対する批判でもあり、地域ならびに後学に対する愛情でもあった。

6. 体制としての発掘能力 遺跡と発掘の規模に見合った体制が組織できるならば、若干の障害や問題があっても、発掘を遂行することは可能である。経験と訓練を重ね、人々は成長し、賢明になる。そして、さらに進んだ学研、学徒が生れてゆく。これらの原則を実証したのが宮谷の発掘であり、県内各地、各所に生じ、また論じられている諸問題に、明確な答えを示したものである。つまり個人の見識や、能力を越えた体制としての組織の能力、発展の可能性を明らかにしたことは貴重な教訓である。

最後に残された課題であるが、その一つは、白山遺跡を含む、宮谷地区の遺跡群の調査をどうするかという問題である。宮谷全地域が、大きな遺跡群と推定されるかぎり、白山遺跡は、ほんの一部であり、現に遺跡の周辺に數カ所の炉跡、敷石、占墳の存在が知られている。また白山から東平にかけて、山梨から中御戸、万代から沢ノ神、下山王から上山王、堀ノ向から馬場、宮の越から西平、あるいは蛇骨沢に沿う一帯に遺跡の存在することが知られている。そして、宮谷の東、淹ノ沢をへてて柿着、宮谷の西は、猿橋、下和田、大島、葛野付近、百蔵山麓一帯の遺跡、一方、桂川南岸の藤崎付近の遺跡など市内各地の遺跡と比較し、白山を検討しなければならない。とりわけ宮谷は、下和田とともに稠密な遺跡の分布地であるだけに、1~2カ所の部分調査だけで結論を導くことは軽率である。幸いなことに、宮谷、下和田の両地区は、市内でも比較的に開発の遅れたところで、遺跡の保存がよく、遺構、遺物の発見に多くの期待が残された地域である。いわば、大月市内における考古学研究上、資料の宝庫である。われわれは、宮谷遺跡の発掘を出发点とし、宮谷、下和田の遺跡の残された課題を、10年、20年、30年の将来を計算に入れ、具体的の計画をもたなければならない。やがて、これらの問題は、他の歴史的史料の収集、保存問題とあわせ、大月市全地域民の意識がこれを決定するであろう。つまり、それらを科学的に客観的に認識することの意義が、全市的に拡大し、それが昂揚した時、歴史的課題に応えられる具体策が熱し、計画は進行するであろう。しかし、これらの計画は、われわれが傍観して待つものではない。また、宮谷地区を始め、大月市内の各地、各所の遺跡の相対的、ならびに絶対的評価に基く、調査と研究を積極的にすすめる中で、促進されるべきと信ずるものである。

(小林利久)

第3章 宮谷の自然環境

地域の概要

約2500万年前、赤石山地、関東山地の山麓まで外海がひらけ、暖流に洗われていた。

	水 級	火 山	関東地方 地層(厚)	都内堆方 地層	文化遺跡区分	先史時代区分
新 生 世	沖 積		富 士 火 山	右 樂 町 層	桂川低位段丘 植物	古墳時代 (AD200-300) 弥生時代 (BC200-300) 縄文時代後期 後期中期 桂川低位段丘層
代	洪 構	後	ウルム	古富士火山	立川ローム層(2) 立川礫層(2-7) 武藏野ローム層(5)	立川ローム層 古富士泥流堆積層 桂川中位段丘層
第 四 紀	付	リス、スルム (第二開水期)			山手礫層(10-1) 武藏野砂礫層	岩南文化
付	リス (第一開水期)		範根火山		武藏野ローム層	旧石器時代 (中 期)
中 期	シンドス、リス (第二開水期)				下木古層(1-30) (東京層或田層)	旧石器時代 (前 期)
前	ミンデル (第一開水期)	古富士火山 小御岳火山 愛宕火山		多摩ローム層20 房風ヶ池層		
	キンツ、ミンデル (第一開水期)					
	キンツ (第一開水期)					
新生代 (第三紀)	新第三紀				西桂層群 桂西 桂北 桂南層	
	古第三紀					
中生代 (二疊紀)	白堊紀 (上二疊紀)					
古生代 (二疊紀)	二疊紀 石炭紀 デボン紀 シラソニア紀 オルドビス紀 カンブリア紀					
前生代						
始生代						

表1 各対比表

その後海底火山の出現により、一帯の海はテフラの堆積により陸化し、御坂山地、丹沢山地、つづいて桂川などが今から1000万年前に、できたものと考えられている。

ひきつづき、隆起作用の外、断層作用により地形が複雑化し、100万年～1万年前頃にかけて、小御岳火山、古富士火山、新富士火山が噴出し、さらに火山灰の堆積や溶岩を噴出し、桂川沿いに火山泥流や溶岩を流出し、火山地形を形成する一方、隆起造山運動や断層作用を50万年前頃には最盛期を迎えて、御坂、丹沢などの山々は現在のごときの山容が、形成されたものと考えられる。(表1)

桂川流域について

桂川流域の段丘地形は早くより、学会の注目するところとなり、花井重次の地質学的研究はその先駆をつけたもので、最近においては第四紀グループの研究や、津屋弘達、町田洋、鈴木康司等のテフロクロノジの立場からの研究発表もあり、また段丘によるロームの研究については、その編年を一応確立されるに至っている。

関東山地や丹沢山地が中新世以降隆起期に入っても、桂川の隆起量は少なく、相対的な沈降地域となり、その関係は第四紀にもおよび、桂川の狭い地峡をつくり、ここに河岸段丘を形成した。

現在、河岸段丘は高位、中位、低位に区分され、高位段丘の形成期は関東平野の多摩～武藏野期に比定されている。特に中位段丘の発達は良好であるが、宮谷付近の桂川北岸(左岸段丘)は小仏層を限る桂川構造線に關係して、段丘の発達が悪く崖錐が発達している。

高位段丘を構成する礫層は70m以上に達し、

地質年代区分	地質年代(現世)	地盤位置	地盤の成因	物質の起源	標準化石	水期	遺物	都内	
								文化階層	古文化
沖積世(現世)	泥土層(腐植土層)	現地性	風成	ローム層などび冲積土	上部骨器 網文文化	新石器時代	低位段丘	漁獵鳥居	
洪積世	立川ローム層	風成	吉高上火山の火山灰	マンモス象 大角鹿、野牛	無	旧石器時代後期	中位段丘	大月猿橋 富浜 藤崎 桂川	
後期	二千	古高上以前の富士火山の火山灰	被石	石、珊瑚、角石	ハンドアラクス	文化	高位段丘	沼井	
	五千	古高上ローム層	古高上ローム層	ナウマン象	第二水期			旧石器時代中期	
	六千	武藏野ローム層	小仏層(メートル等高線段丘以上)	鰐石、角鶴石、珊瑚、石、石灰、珊瑚	第一水期			器時代前	
	一万四千	下栗古ローム層	下栗古ローム層	鰐石、角鶴石、珊瑚、石、石灰、珊瑚	第二水期			前	
洪積世初期	多摩ローム層	風成ト平野	古高上ローム層	古高上ローム層	古高上ローム層	古高上ローム層	古高上ローム層	古高上ローム層	古高上ローム層

表2 赤土層(関東ローム層)の年代区分

その上に15m以上のローム層をのせている。

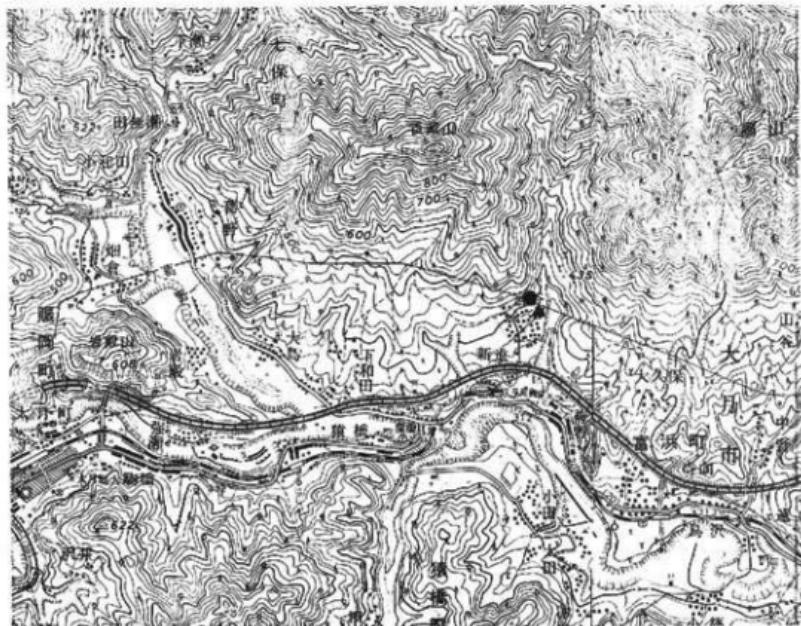
中位段丘の礫層は20m内外で、その上に10m内外の集塊質泥流をのせ、さらに7~8mの新期ローム層で被われている。低位段丘は普通数段に区別され、次第に低下し沖積層につづいている。

(表2)

白山遺跡の自然環境

百蔵山および扇山にかけての断層は加藤昭一等の研究や、山梨県地質図によって、すでに明らかにされている。百蔵山や扇山は南側斜面の山麓において、広大な緩斜面を展開して桂川に臨み、桂川はその付近に河岸段丘を形成している。百蔵山と扇山の裾合谷を南下する滝の沢は、名のごとく下削作用が著しく、侵食谷をもって山麓の緩斜面や段丘を分断し、持続付近で桂川に合流している。

遺跡のある白山は、標高400m~401m、東を滝の沢、北を百蔵山、南は桂川まで広がる百蔵山の緩斜面が展開する。眺望や日照に恵まれ、また水の利も得やすいところに位置している。すなわち宮谷地区は桂川段丘並に百蔵山麓に位置する集落で、国道20号から分れ急な段丘崖を登りつめると南に傾斜している段丘、そして山麓へとつなぎ、一帯は畑作の卓越地で普通畑、桑園で占められている。用水は滝の沢より簡易水道でまかなっている。遺跡は集落の最上段の普通畑にある。



第1図 遺跡付近の地形

この付近のロームは1~2.5mでその下部は塵埃や滝の沢の堆積物と思われる粘板岩、千枚岩、頁岩の角礫が厚く堆積している。ロームの区分は定かでないが、黒土帯と呼ばれる新期のテフラの黑色火山灰層、その大部に古富士のテフラの赤褐色スコリア質ローム層となっている。

この付近は平坦な地形とくらべて、緩斜面とは言え、斜面は常に重力的には不安定な場所であり、今までそのため絶えず削剥や堆積などの、地表の変化が行われて来たものと思われ、一連の斜面と思われるこの斜面も、局部的にはその中に削剥の卓越する部分もあれば、堆積の卓越する部分も存在している。

遺跡の包蔵地は立川ローム層上部の褐色土層で、すでに明らかにされている宮谷遺跡もこの褐色土層に位置づけられている。(図1~2)

(金田 賴貞)

参考文献

鈴木 康司—南関東南西縁地域の第四系の層序および地質構造史の研究

(資源科学研究所彙報60、61)

町田 洋一テフロクロノジーによる富士火山とその周辺地域の発達史

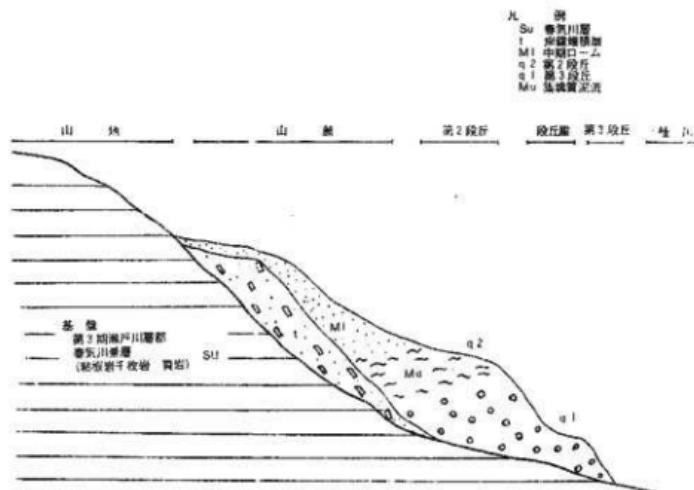
(地学雑誌VOL. 73 5、6)

花井 重次—桂川沿岸の地形および河岸段丘の研究(地理評3〔3、4、5〕)

津屋 弘達—富士山の地質学的並岩石学的研究(農研彙報16〔2、3〕)

山梨県地質図(山梨県〔1970、3〕)

山梨県地質誌(山梨県〔1979、3〕)



第2図 遺跡付近の断面図

第4章 宮谷白山遺跡の発掘調査

1 発掘の経過

土地所有者の石井徳重氏により、すでに埋甕と炉石の一部のあるところが確認されていたところから、発掘の方法はそれを中心に、一辺2mのグリッドを東西にA～E、南北に1～8と合せて40枠設定し、順次発掘を進めることになった。

第1日目は、器材の運搬、点検、グリッドの設定、テントの設置および発掘の意義や遺跡の重要性などを中心に現場ミーティングを行ない午前中を費やしてしまった。

発掘は午後になって行なわれ、設定された各グリッドのうち、A-1区、C-1区、E-1区、B-2区、D-2区……というふうに第1段階では、チドリ式に発掘を進めた。各グリッドとともに表上からローム面まで掘り下げる作業であったが、遺物の出土はほとんど見られなかった。

2日目には参加者も多くなったことから、A-5区から6区へと、チドリ式から拡大することとなった。その結果、A-6区から、石井徳重氏により確認されていた埋甕が発見された。同じ頃、C-5区では炉石が発見され、住居跡の位置を推定できることとなった。

一方P-6区において、住居跡の壁溝と思われる溝が確認されたため、全力でその溝を追跡してみることとなった。

3日目は雨のため、現場での発掘作業は中止とし、それまでに発掘された遺物を洗い注記をする作業に切りかえた。雨は昼頃あがったが、泥をこねくってしまうため、水洗と並行に数人で住居跡のプランを追究する作業まで進めた。

4日目は、セクションの壁をのぞいて、各グリッドを連結させるために、壁を取り扱う作業に

集中し、壁溝の全貌を明確にすることができます。その結果、壁溝は一辺約6mの方形プランで、三方をかこんでいたが、入口に相当する南西部では欠けていることが判明した。住居内のガラスから貯蔵穴と思われるピット



が確認され、土器片とともに炭化クルミが発掘された。また床面からは各柱穴が確認され、排土された。同時に住居跡のテラスにあたる前面ではピット群が発見されたために、A-5、6、7、8区の西側にそれぞれ1mの拡張区を設定し、そのピット群の範囲を追究した。

この頃、隣市の都留市教育長をはじめ教育委員会および都留市法能遺跡の発掘関係者の来訪があり、同遺跡の成果を聞くことができた。

5日目は、遺跡の地形測量とともに、住居跡の測量、セクション図の取得、写真撮影のため、住居跡とその周辺を消掃することに力を注いだ。

一方、余力が生じてきたことため、この白山遺跡から南方約200mにある金山遺跡の発掘を試みることになった。

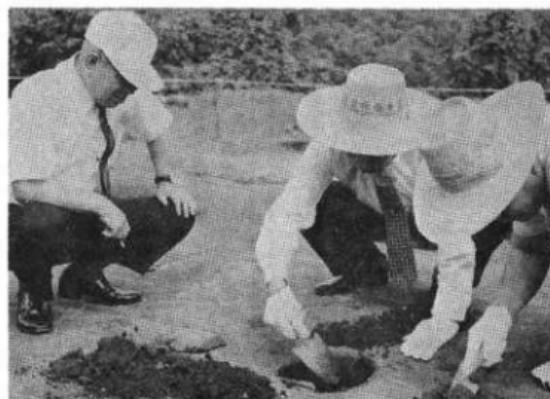
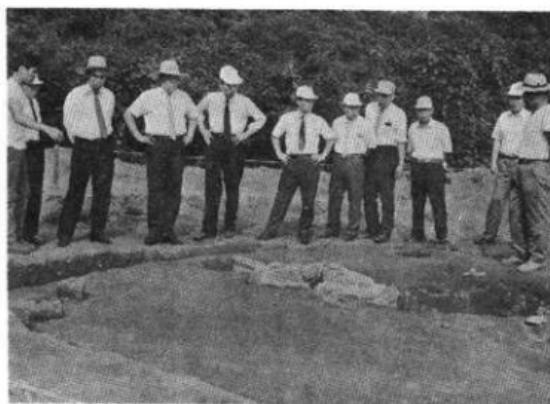
(後述してある)

6日目も昨日とほとんど同じような作業に終始した。

発掘作業最後の7日目になると、白山遺跡での作業はほとんど終了したが、さらに住居跡の復原に関する問題が提示されるようになつた。午後には志村市長、小保助役などをはじめ関係各位の発掘、見学があつた。

最終日の8日目に、この住居跡が近い将来に復原されることを期待して、石灰粉をまいて埋めもどし作業を無事終了した。その頃、金山遺跡の発掘も終了し、ここに発掘作業の全行程を完了した。

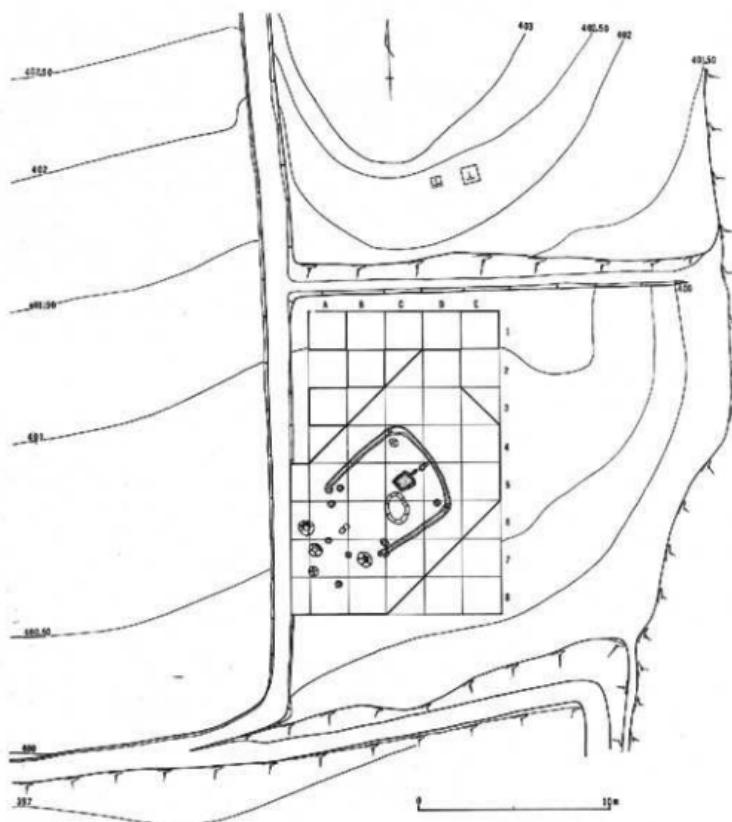
(重住 豊)



2 層 位

層位は、畑地であるため、地表面から平均30~40cmは耕作のため、擾乱が著しかった。しかも表土層がきわめて薄いため、全域にわたって耕作土の下すぐにローム層がつきあたってしまうことも多かった。また住居跡についても、壁の残されている地区を見つけることすら困難なくらいであった。それでも、比較的擾乱の少ない住居跡西北よりでは、プライマリーな状態で確認することができた。住居跡断面図(第5図)A-Bで説明すると、耕作土の下に、ごく薄く褐色土があり、ローム層がそれに続く、そして各ピット、炉内ではローム層の上に黒色土が堆積している。いずれにせよ、褐色土の薄かったことから、遺物の出土も、住居跡床面直上に限られていた。

(重住 豊)



第3図 遺跡地形図と発掘区



第4図 住居跡と遺物の原位置

3 遺構

住居跡（第5図）

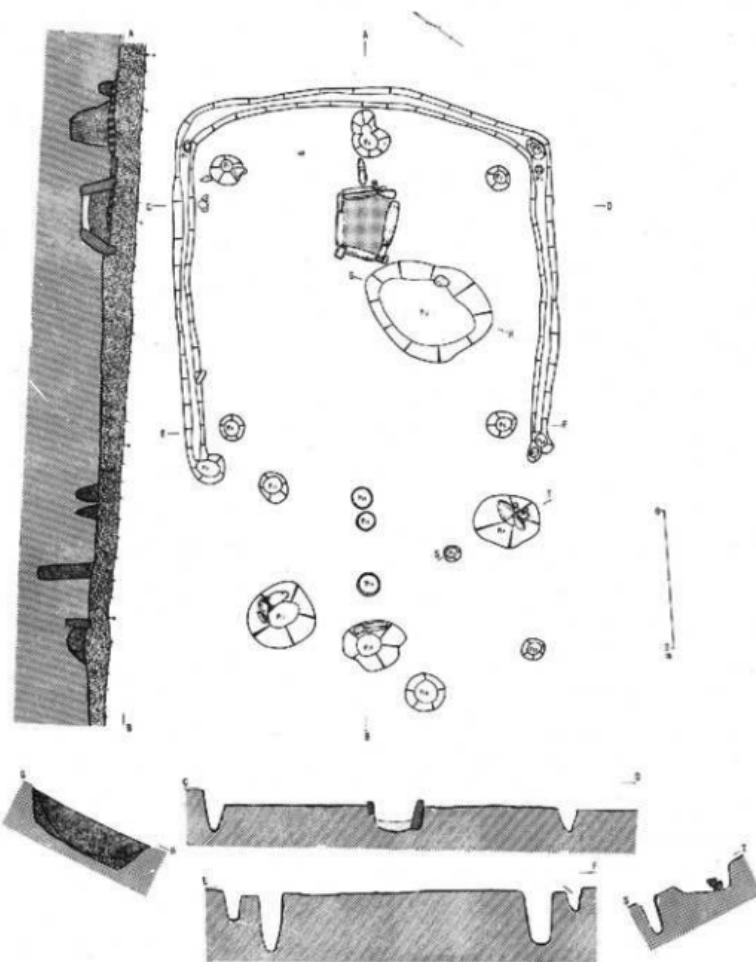
C—4区を頂点にして、東側はD区、南側は8区、西側はA区の拡張区まで伸びている。表土層はきわめて浅く、かつ耕作土となっているため、住居跡の床面近くまで擾乱がみられた。当然住居壁も耕作によって大半が破壊されていた。とりわけ東側では著しかった。それでも、B—4～C—4区にかけて、最も保存状態が良く、その壁高は約20cmを数えた。しかし、A—Bの断面図で見られるごとく壁溝のない入口部では、床面と、屋外の平垣面との高さがほぼ同じであったことから、壁は存在しなかったとみてよいだろう。またC—D断面図とE—F断面図を比較して、屋内の奥より、手前の方が壁の高さは低くなっているようである。したがって、壁溝の存在するところでは、最低20cm前後で豊穴となっていたことは推定できよう。

床面は、ローム面を利用し、良く踏み固められており、特に炉の周辺では、パリパリしているくらいであった。しかし、壁溝に沿っては、かならずしも良いとはいはず、むしろやわらかくて壁溝を探すにも困難なところもあった。また前庭部では深耕のため、一部擾乱されているところもあったが、それらはいずれも、あまり深くなく、プライマリーな状態であるかは判別しやすかった。

壁溝は、深いところで床面から40cm、浅いところで約20cmで、三方をほぼ方形にまわっており、南側が欠けている。しかも2個の埋設土器（P14、P15）があることから入口とみてよいだろう。壁溝のコーナー付近と、きれめのところにそれぞれ小ビットがあった。それらの小ビットは、壁どめを強くするため、やや太めの丸木でとめた痕跡と思われる。

ビットは室内、室外を合わせて、22箇所を数えた。そのうちP1～P4は深さ約70～80cmと平均しており、位置をも考慮して、主柱穴とみてよいであろう。またP5はやや巾が広いことと、先の4本より浅いことから、補助的な役割を果していたものと思われる。さらにこのビットの中から炭化クルミが1点出土したことは注目できよう。前庭部ではやや雑然とつくられているが、炉とP14、P15の埋設土器を一直線上にのばしてみるとP16、P18は張り出し部の主軸となりそうである。しかもP18には角柱の石がはめこまれており、住居入口の施設と思われる。さらにその周囲には石のはめこまれたビット（P17、P21）が存在し、入口部造営に利用されていたらしい。また、主軸線上の延長、つまり炉の位置から入口部を望めば富士山を見ることができ、この宮谷地区の人々の話によると、最も風の強い方位といっているところから、防風設備となっていたかも知れない。

貯藏穴（P12）は、炉からやや南側にあつたところにあり、ほかのビットと比較して、極めて大きく長軸1.90mもある。埋没した土壤は黒色の下に、ローム混りの黒色土が落ちこんだように堆積しているところから、縁に貼られ、フラスコ状になっていたことが想定できる。したがって、本来の直径は、現在のそれより狭く、中が広がっていたといえよう。深さは50cmを算する。この



第5図 穂穴住居跡実測図

中から2点の炭化クルミが出上したことからも貯蔵穴とみてよいだろう。

かはほぼ扁平な石を組んだ、いわゆる石畳炉で、床面からの下底面は約40cmあり、その上に約10cmの厚さで、焼土が固くしまって堆積していた。しかも組石は床面より上に、10~20cmつき出した感じになり、内側は深く、一見利用しにくい感がないでもない。この炉の奥壁側には長さ約36.5cmの石棒が床面に密接して横倒しとなり発掘されたが、従来は立っていたらしく立石を思わせる。

(川崎義雄)

4 出土遺物

出土した遺物は、いずれも中期縄文時代に編年され、それらのほとんどは、豊穴居跡床面ないし、貯蔵穴からの出上である。したがって、それらの編年の考察を述べることにより、住居跡の編年の位置づけにもつながるであろう。それらが出土した位置は第4図で示したとおりである。しかも遺跡の出土位置を復原することによって、住居内各位置の役割が明確になると思われる。遺物には土器、石器などの文化遺物のほかに炭化したクルミの自然遺物があった。そこでそれらについて述べてみよう。

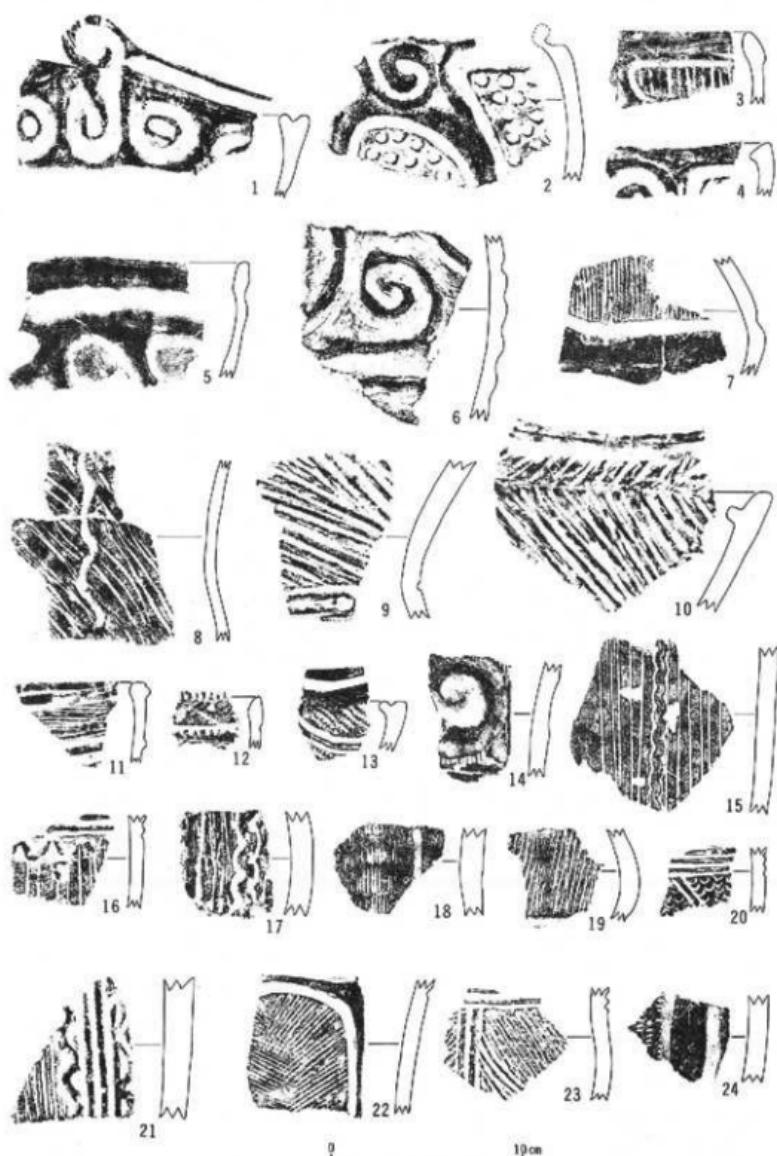
A. 土 器 (第6図~第9図)

キャリバー状をした深鉢形土器(1~7、11~14、36~38)が基本的な形態として最も多く出土した。この時期特有の渦巻文、の字文はかなりの退化のあとがあり、中心的な意匠文とはなっていない。わずかに37、38でその名残りをとどめているにすぎない。しかも区画するための頭部文様帯の補足的なものにすぎず、むしろわらび手状の簡略した文様(2)や円による(5)意匠で補足的ながらも文様帯を構成しているといつてもよい。文様の退化とともに、形態的変異も見られる。つまり、口縁部のキャリバー状弯曲は、36をのぞいてさほど強くなく(1、2、37)、むしろゆるやかなカーブを描いているとみてよいだろう(3、5、38)。また胴部の形態も、極端な屈折をせず、口縁部に比例して、なめらかになっている(8、37、38)。

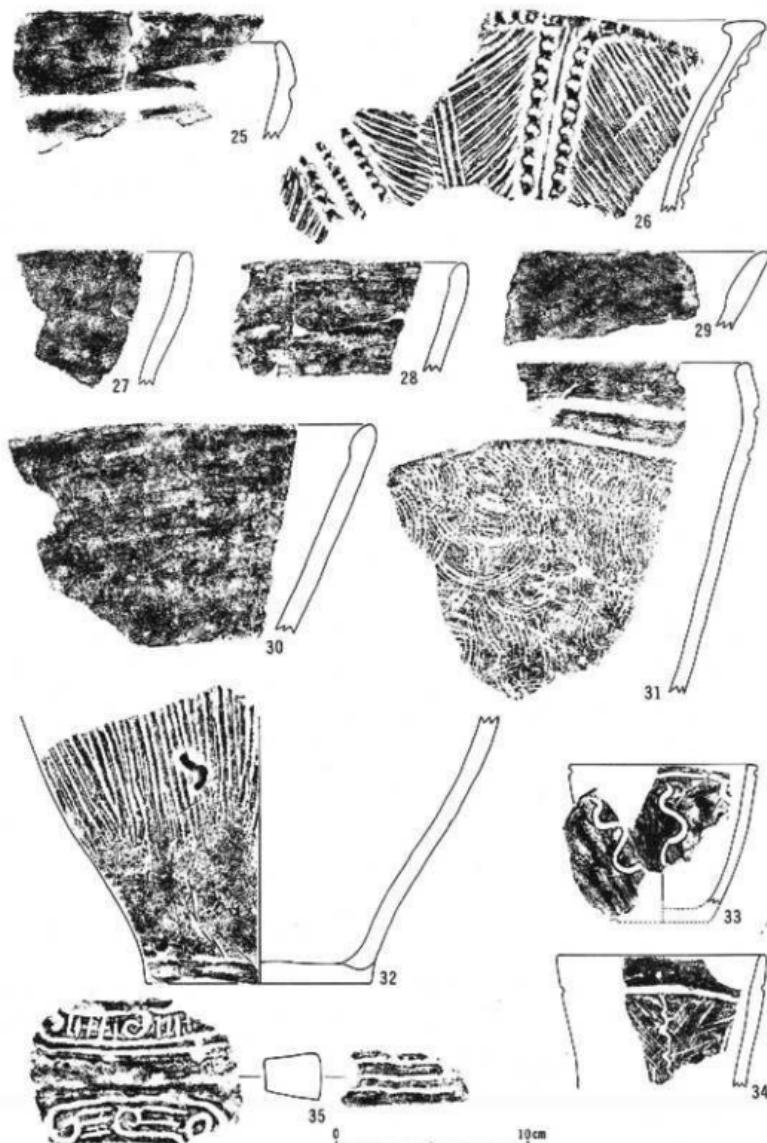
口縁部の直徑から見て、人形のものに、1、2、5、6、36~38などがあげられるが、3、4、11~14のように小形のものもある。また7はそれら一連の深鉢形土器の胴部破片と思われる。胴部断面のカーブは37の完形土器のそれと大変よく類似している。

普通は、口唇部ないし、口縁部のすぐ下には太い沈線を周らすことが多い(1、2、5)が、細い沈線で、半円状の区画する場合もある(3、37)。また38のように隆起文で区画することもある。しかし概して沈線文による施文の方が隆起文に対してよりも多い。

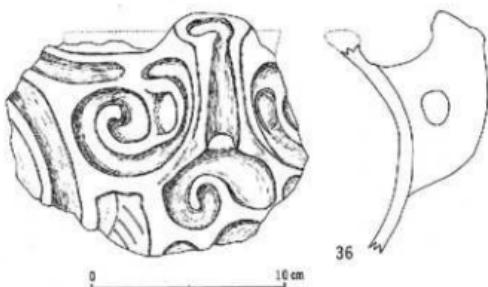
胎土は全般的によく焼きしまり、1、5、6のように光沢をもったものすらある。色調は、光沢のあるものは黒褐色をしているが、茶褐色も多い。37は、住居跡(Pit14)に埋設されていた



第6図 出土土器



第7図 出土土器



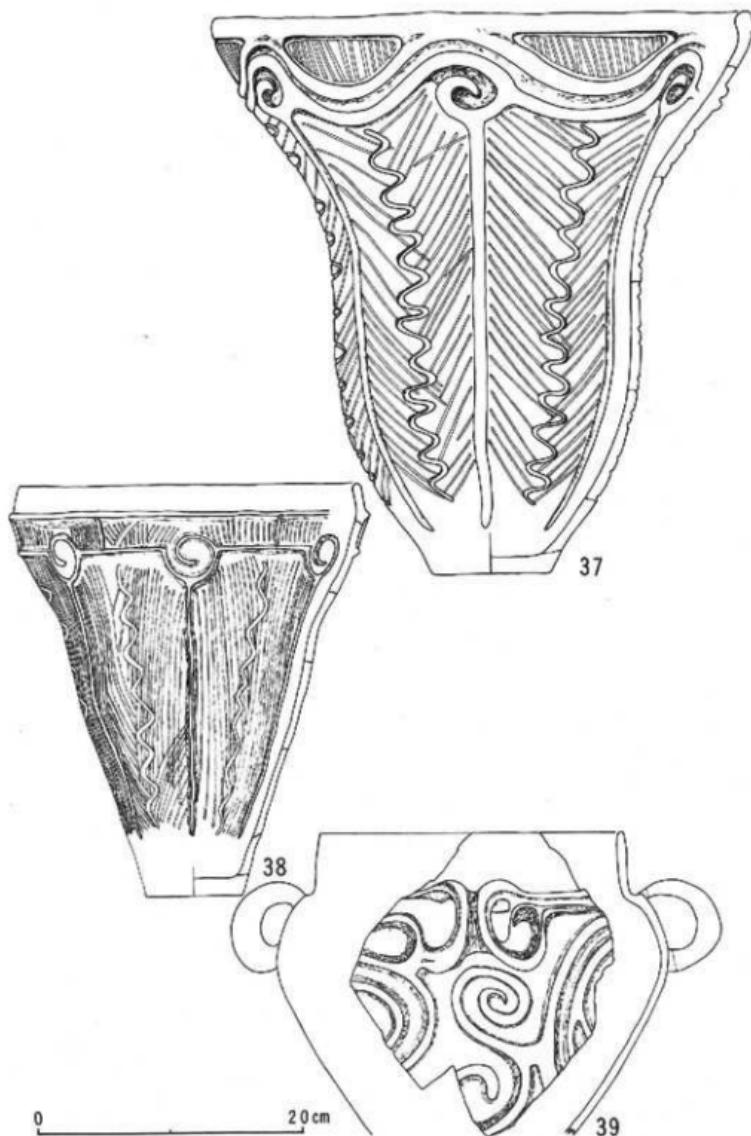
第8図 出土土器

土器である。頸部の渦巻文を主要文様として、6単位の文様構成をしており、すべて同一方向に巻いている。その渦巻文から底部付近まで貼り付けによる懸垂文があり、それを一区画として、その間に沈線による波状の懸垂文がみられる。高さは約42cm、口径は約41cmである。38も37と同じように6単位の文様構成をしているが、渦巻文は対称的に逆の巻きかたをしている。高さは約31cm、口径は約26cmを算する。住居跡（Pit15）に埋設されていた。

製作技法はいずれも同じように、底部を含んで7段階に分けて輪積と積上げ技法を使っている。しかも底部上的一段目と口縁部最上段が巾狭く積みあげられている点で共通している。また37の土器は出土状態では、口縁部から2段目のところではずれた状態となっており、器表面を貼り合わせ厚くしている。

壺形土器には、9、10が代表的な例としてあげられよう。胴部の破片として、21を除いて、同一個体ではないが、16、17、32などがそれに類似するものであろう。しかし、口縁部から底部までの一貫した土器のないことから全体の形態をうかがうことができないのが残念である。それでも、この種の土器は、口縁部から底部近くにわたって条痕文で充填される点は他遺跡でみられるものとほぼ一致する。口縁部（9、10）は斜めに、胴部（16、17、21、32）では概に、それぞれヘラ状工具なしし、竹管状工具で施文される。一般的には、口縁部と胴部とを区分する頸部には、沈線や波状の隆起文を用いた例が多い（9、16）、また胴部でも波状の沈線文（17）、隆起文（21、32）が懸垂文としてみられる。胎土中にはわりと大粒の石を含み、ややザラザラしている。黄色をおびた茶褐色をし、大形であることから器肉は厚い。

前記深鉢形、壺形土器のほかに15、18~20、22~31などがあり、そのうち特異な深鉢形土器（26）、無文深鉢形土器（27~30）などが含まれる。15、18、20、22~24は胴部破片、19は口縁部破片と思われる。竹管状工具による条線（15、22、23）、刺突文（20）が主体となり、ハケ目状工具の条線（18）、撚糸（L）を利用したもの（19）などがみられる。条線のほかには、いわゆるコンバス文がつけられる例もある（15）、26は口縁に沿って、刺突のある隆起文が貼り付けられ、その隆起文は、胴部に向って、二条ないし三条が懸垂され、それを区画とし、ヘラ状工具による綾杉状の沈線文が三条の沈線を中心にして施文されている。その施文は二重になっており、交合した



第9図 出土土器

部分でそれが見られる。そのことから、一度は地文とし、その上に再度施文している点で注目してよいであろう。31は口縁の直徑が比較的大きい深鉢形土器で、胎土中に粒砂を多く含み、器面はザラザラしている。頭部には二条の沈線が刷られ、胴部にはハケ目状の孤線文が縱方向に描かれているが、部分的に横方向の場合もある。それに、前者が連続的であるのに対して、後者は單一につけられている。25、27~30は無文の深鉢形土器であるが、25は頭部に沈線が刷っているため、その範囲に含まれないかも知れないが、便宜的に同類に含めておく。口縁部のやや内曲していることから、前述のキャリバー状深鉢形土器の類に含まれるかも知れない。27~30は全く無文に属し、口縁部から胴部にかけて、ほとんど同じ厚さで統一されているもの(27、28)と、口縁部内側にやや厚みをもたせているもの(29、30)とがある。器面は茶褐色をし、相対的に良く研磨されている。

33、34は小形のコップ状をした深鉢形土器である。頭部に一条の沈線を刷り、胴部に波状の懸垂文が施文されている。またヘラ状工具による条線がつけられることもある(34)。ともによく研磨され、器面の整形は大変よい。

39は環状の把手をつけた瓢形土器で、器面の整形是非常によく、黒色に研磨されている。隆起文による渦巻文が意匠され、それに沿ってややうすらと沈線化され、貼り付けの整形をしていくことがわかる。

35は釣手形土器の釣手部の一部である。雲母片岩を少量含み、表面はエビ茶褐色に光沢をおびているが、厚みのあることから、内部は火のまわりが悪く、ボロボロしている。文様は側面と下部にあり、側面は、それぞれが類似した文様ではあるが、渦巻文の間に、横方向と縱方向とに沈線が走っている点で異なっている。

(川崎義雄)

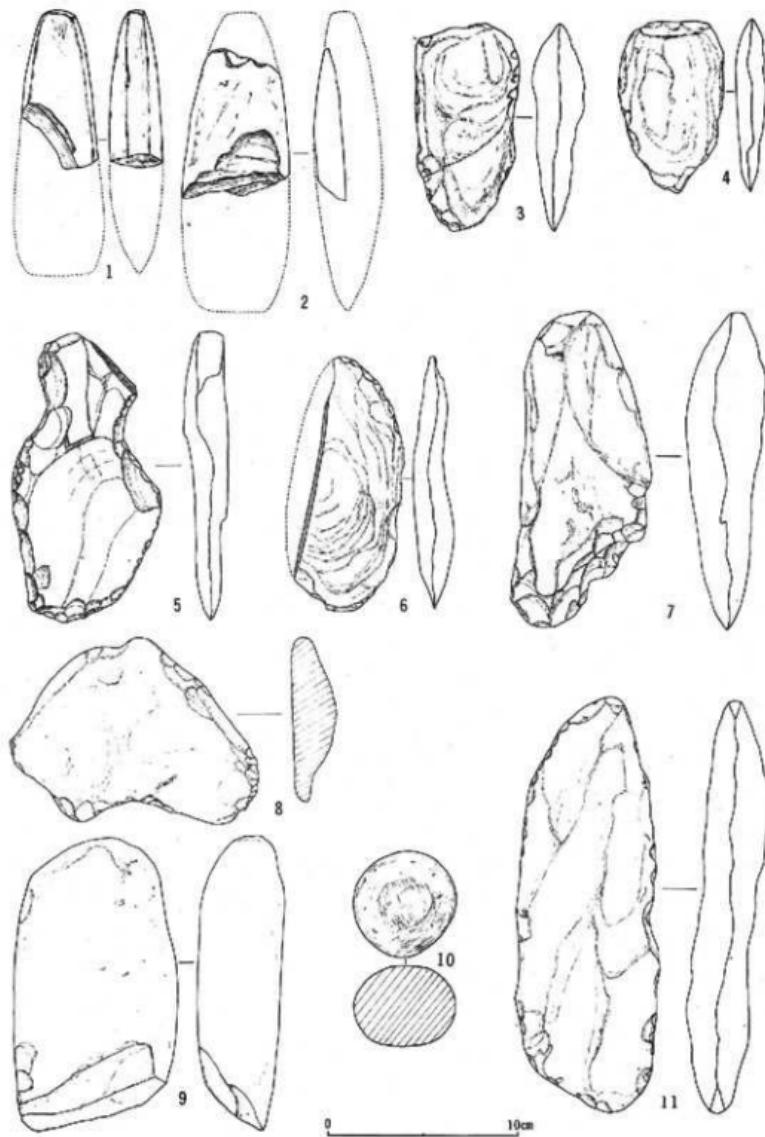
B. 石 器 (第10図~第11図)

(1) 磨製石器 (1.2)

緑色变成岩製の石斧で、いずれも基部付近だけの残存で、刃部が欠損しているため、その形態を知ることができないことは残念である。1は特によく磨かれており、稜を明瞭につくっている。2は丸味をもたせながら磨いている

(2) 打製石器 (3、4、6、7)

いずれも、石斧として明確に判別がつく。7の礫岩をのぞいて、变成岩で作られているため、板状剥離しそうで、もろい。いずれも短冊形に近い形態をとっていて、山に対して長さが心持ち短かいのが特長的なようであり、刃先が尖りめになっている(3、4)。また刃部と基部とに細部加工があり、その判別のしにくいもの(6)がある。塵器と思われる石器の例もある。刃部は使用のためか加工のためかははっきりしないが、著しく荒れている。基部の磨滅は著しいため、調整剥離は明瞭ではない(7)。



第10圖 出土石器

(3) 石匙(5)

基部の抉入は粗く剥離し、刃部は入念に剥離している。実測図に向かって、右側に刃部が薄く作られ、それと反対側の左側は比較的厚く作られている。削器としての皮剥ぎなどに利用されたのであろう。安山岩製である。

(4) 磨器(9)

自然面をほとんど残し、片面に刃部を粗く加工して表出している。いわゆる片刃石器に分類できる。硬砂岩製である。

(5) 磨石(10)

まるくやや扁平な硬砂岩を利用して、まわりを同心円状に、さらに上面の扁平部を同一方向に、それぞれ磨いている。

(6) 棒状石器(11)

礫岩を利用したもので、やや扁平な形に加工して、斧状にしている。しかし、両先端とも丸く刃部を作っていないことから、斧とは考えられそうにない。むしろ使用痕と思われるため敲石に使用されたらしい。

(7) 不定形石器(8)

変成岩製で、形態的にあまり類例がみあたらない。強いてあげれば両頭斧といえるかも知れない。しかし剥片が欠損しているため、その刃部が明瞭ではない。また中央の抉入部が磨滅しているため、剥離ははっきりしないが、木など丸いものを削るのに利用されたものかも知れない。

(8) 石棒(第11図)

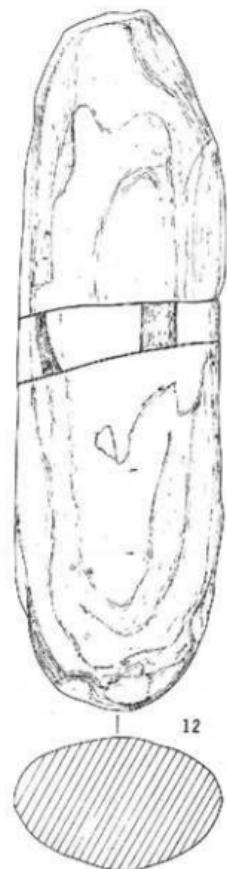
住居跡炉の奥どなりより、横倒しになり出土したもので、立石を思わせる出土状態であった。全長36.5cm、巾約11cm、厚さは7cmを数える。変成岩製である。

(川崎義雄)

C. クルミ(図版5)

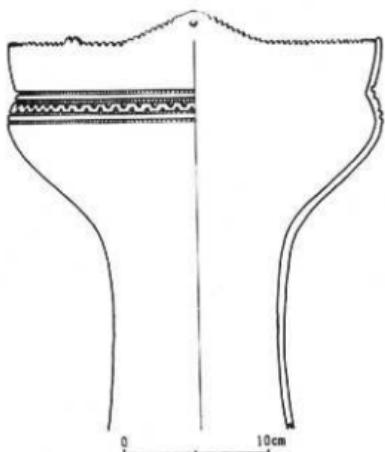
いずれも炭化しており、左は住居跡P5内より、右の2点は貯蔵穴P12内より出土した。後者には、ややずんぐりしたものと、縱長のものとの2種があった。

(川崎義雄)

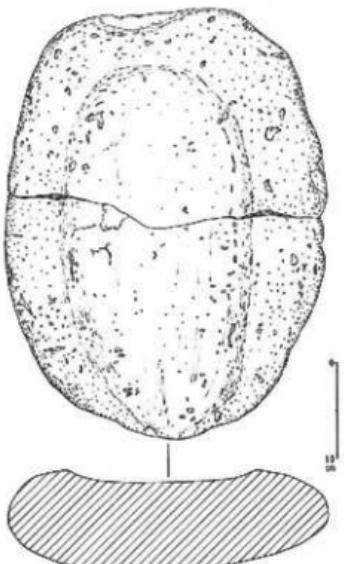


第11図 出土石器

5 参考資料



第12図 石井徳重氏所蔵の土器



第13図 石皿 実測図

(1) 土 器 (第12図)

石井徳重氏によって採集されていたもので、同氏の説明によると、竪穴住居跡の東南よりに長径1.50m、短径1.00m、深さ70~80cmの小穴があり、その中に伏られて出土したとのことであった。

すなわち第3図の発掘区図から概算すると、Eから延長された崖に近いG-8区の所に位置する。ピットの形態から土器に推定される。また土器に伴出して黒曜石のチップが採集されている。

土器は、底部を欠損した深鉢形土器で、部分的には赤褐色をしているが、全体的には黒褐色をしている。器面上部は、よく磨研され、光沢をもっているが、胴下半部はザラザラしている。器肉はきわめて薄い。口縁には、小穴のある一個の山形把手と、二個の小突起を配し、刻をついている。文様帶は頸部に限られ、竹管状工具による爪形文帶と、波状文帶とが周らされ、構成されている。波状部は三角形に近い掘りこみによって意匠されている。

現存する高さ（把手はのぞく）は27cm、口径は25.5cmを算する。

文様、形態から中期初頭の五領ガ台式土器に対比できるであろう。

またこの底部の欠損した土器の出土状態から、墓地として把握できるであろう。

(2) 石 皿 (第13図)

片側半分は住居跡付近で表探し、石井氏宅におかれているものと合致し、完形となったものである。住居跡に伴出するものと思われるが速断はゆるされない。扁平な多孔質安山岩を利用している。最大径は45cmを数える。 (川崎義雄)

6 まとめ

以上本遺跡で発掘できた住居跡およびそれに伴出した遺物について説明を述べてきたが、ここでそのまとめを述べてみたい。

まず住居は竪穴形式をとり、平面形態は方形をしている。しかも南西に、張出し部をもつている。

中期縄文時代における竪穴住居跡の一般的形態として、円形が古くから知られてきた。しかし最近の調査では、隅丸方形をしたものが注目され（早川泉 1969）、さらに資料が増えってきた。たとえば本県内では、中道遺跡などにもみられそうである。関東平野部の神奈川県、東京都、埼玉県方面では、神奈川県川崎市鶴見台遺跡（鶴見台遺跡調査会 1971）、横浜市港北区ニュータウン内遺跡（釜口幸一他 1971）、東京都三鷹市北野遺跡（川崎義雄 1970）、日野市豊山吹上遺跡（早川泉 1969）、埼玉県所沢市勝沼遺跡（埼玉大学考古学研究会 1970）などとその類例は増える。

それに対し、長野県方面の中部山岳地帯ではあまり多くなく、むしろ円形が圧倒的に多い。

まして当遺跡ほど明確な方形の住居となると、県内はもとより、周辺地域でもその類例は見当らない。

また、はり出し部のある住居跡として注目されよう。そのはり出し部はゆるやかな傾斜地を利用してつくられており、壁溝がないということも合せて、明確に、出入口であることを物語っている。しかし、かならずしも神奈川県川崎市仲町遺跡（仲町遺跡発掘調査団 1971）で見られるように、台地端部に向くようにしてつくられているとは限らなかった。むしろ、その方向は富士山を望めるものであり、山岳神御と結びつけて考えられることも、偶然の一例ではないだろう。まして炉端の立石を神御体として、考慮に入れたとしても不思議はない。さらに、はり出し部には、胎盤を埋納したと思われる埋甕が2個存在する。

この胎盤を埋納するという風習については、すでに木下忠氏によって述べられている（木下忠 1970）。

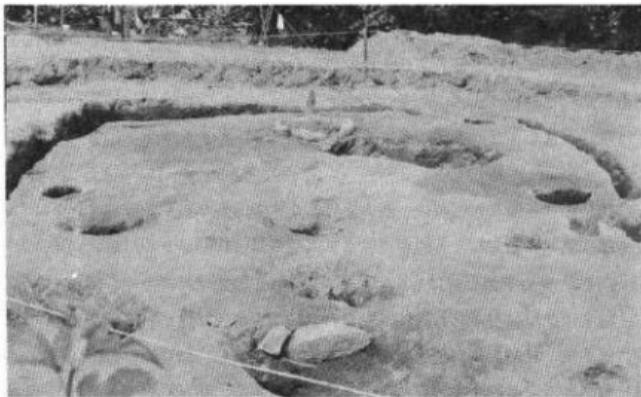
つまり、戸口に胎盤を埋納することによって、踏めば踏むほど丈夫に育つという呪術が働いたという民族例に一致するという。

のことからも、はり出し部は出入口として看取することができる。

次に出土遺物について述べてみると、出土した土器はすべて中期縄文時代に帰属することができる。しかも竪穴住居の床面に近接していることから、縄年代的考察を試みた時、それは住居の縄年代的位置づけとなる。

ほぼ完全な状態をとどめているのに、埋甕に利用されていた上器2点があげられるにすぎず、残りはほとんど破片となっている。したがって、この埋甕が時期判別には最も信憑性に富んでいる。

この2個の土器については、すでに述べたように口縁部の文様帶に若干の相違があつても、文様構成、製作技法でほとんど共通している。極端な渦巻文は退化の傾向にあり、口縁部の屈曲度



は少なく、かなりゆるやかなカーブを描いている。いずれにせよ、条線文が主要文様となっている。この種の土器は、長野県方面では曾利Ⅲ式に対比されるであろう。しかし口唇部ないし、その裏面がへらで調整され平坦になっている。またキャリパー形土器は、胴部のふくらみは少なく、口縁部の屈曲が大きい。(藤森栄一、武藤雄六 1964)。その点で、形態的には、関東平野部における加曾利EⅡ式に類似している。

そのほかの破片も出土状態から、先の埋甕に伴出するものとみてよいであろう。そのような観点から、埋甕のほかに、キャリパー形をした深鉢形土器を中心とし、甕形土器、小形の鉢形土器、釣手形土器、把手つきの甕形土器などと一應の土器組成を整えていることが明確になる。したがって住居跡の編年も加曾利EⅡ式に帰属する。

また破片を含んだとしても、あまりにも網文を施したもののが少ない。多くは、ヘラ状工具、竹管工具を主要の工具として、条線文、コンパス文、爪形状文、刺突文などが多く、関東平野部の加曾利EⅡ式とも、趣を異にしていることは事実である。といって中部山岳部に目を転じたとしても、文様の複雑さは目立つ。もっとも長野県方面での報告書の多くは、完形土器で埋めつけられ、破片の絶対量はあまりにも少ない。したがってその比較検討に困難なところがある。あるいは逆に、破片数が少ないことを、長野県方面の研究者は問題視した方がよいかも知れない。

これら破片の中には、関東平野部の該期にあまり見られないものもあり、この地方特有の土器組成を示している。たとえば、18、24、26などはその好例であろう。さらに、強いてあげるならば、熱海市初島宮前遺跡(小出義治 1968)などに類例が求められるものもある(24)。しかし、わずか1、2例で、一住居跡出土の一括資料をもって、土着性の土器を導き出すことも、他地域との相関関係を追究することにも、かなり無理なところがある。それでも、すでに述べたように、各地域研究の趨勢を顧慮しながらも、その追究を怠る訳にはいかない。なぜならば、それら遺構、

遺物を創造し、利用してきたのは人間にほかならないからである。すなわち彼らは、人間個々の生活を営みつつも、集団を形成しながら、他集団と文化の交流を保ち、人間（社会）集団を拡大していたからである。換言すれば、人間は孤立して存在しきれないからである。

そこで最後に、彼らの交流圏を述べてむすびとしたい。

この郡内での研究には、自然環境、とりわけ地形を無視する訳にはいかない。東には、関東平野部からのびる丹沢山塊によって、北は秩父山地、西は秩父山地からのびた南大菩薩山嶺、そして御坂山塊へと続き、三方は複雑な山地によって遮断された状態になっている。そしてその谷間をぬって、桂川（相模川水系）が四方八方から流れ、多くの河岸段丘を発達させ、相模湖で水を集め、相模川となって、相模湾へと注ぐ。

この地形的環境から、郡内地方は、むしろ相模湾方面と結びつきがあったといつても過言ではないだろう。一方、甲府を中心とした国中地方は富士川から釜無川、そして長野県方面へと結びつきが可能となってくる。そのことから、郡内地方では、直接中部山岳の文化と結びつけて考えることより、下流の神奈川方面との比較検討が重要となってくる。もちろん国中方面では、長野県方面と相互関係を保つつつ、静岡県方面との比較研究が必要となってくる。そして、それらが合流する伊豆方面との比較研究を追究することによって、間接的に各地域との相關関係が明確になってくる。またそれによって、この郡内地方の特殊性を導き出すことも可能となってくる。それには一例の住居跡のみの調査に終ることなく、集落としての総合的研究に発展させねばならない。もはやここに、その第一歩を踏み出したといってよいだろう。

（川崎義雄）

第5章 宮谷金山遺跡の発掘調査

1 発掘の経過

金山遺跡は白山遺跡の南西約200mのところに位置し、轄野幹氏の宅地内の宮谷835番地に所在する。

かねて同氏から縄文土器の出土があるとして、教育委員会に連絡がもたらされていた。そこで今回の発掘調査に先立ち昭和46年春に実査を行なった。その結果、上塙らしい遺構であることを確認して埋めもどしをして本調査を待つことになった。

発掘範囲が大変狭かったことと、本発掘が白山遺跡の調査に主眼点がおかれていたことからも、白山遺跡での発掘が、ある程度目度のついたところで実施することになった。

したがって、終盤に近くなった7月28日から2、3人で行なった。すでに埋めもどされている土を探りのぞくと、石の配列が明瞭になってきた。さらに中央部の石のない部分から、縄文土器の約4分の1が横倒しとなつて出土した。

29日には、周辺の消掃まで済み、翌日からの写真撮影と実測図作成の作業を残すまでとなった。

30日の午前中に写真撮影は終り、午後から実測図作成の作業にとりかかる。この頃、白山遺跡と合せて、市長ほか関係各位の視察があった。

31日の昼頃、実測図作成作業は終了し、2時頃には埋めもどし作業も無事終り、発掘作業の全行程を完了した。

(重住 豊)

2 層位

本遺跡は、轄野氏宅の庭に存在することと、倉庫建築、さらに水道管配管のため、すでに組石上面まで削平されており、上部の層位をプライマリーな状態で確認するまでにはいかなかった。ただし、造構ぎわに、原地形のまま樹木が立っていたことから、その根元まで換算した高さは約80cmであった。したがって造構は、表土下約80cmのところに構築されていたことになる。しかし、表土から造構までの中间層は、根による擾乱が著しく、明確にすることは不可能に近かった。

また轄野氏により、削平された時点に、造構内部の土器の出土する所まで、すでに掘り込まれ、確認が行なわれているため、内部上面の土層すら明確にできなかつた。明確にできたことは、造構はローム層を掘り込んで構築され、内部には黒色土が堆積していたことである。

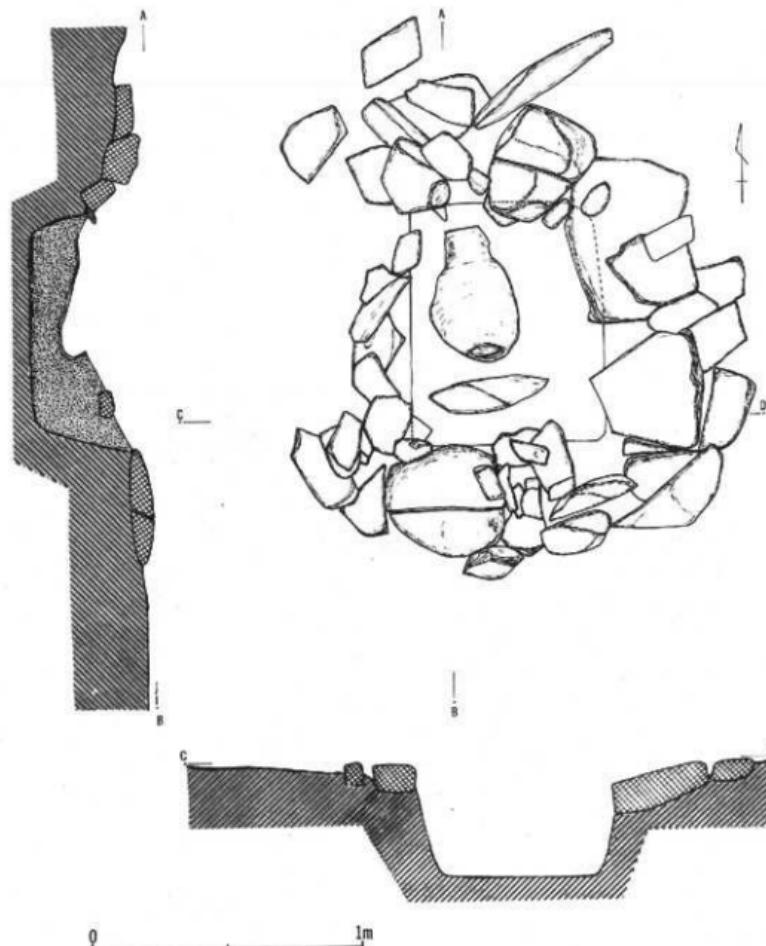
(重住 豊)

3 遺構

土 塙

遺構の平面形態は、長軸が南北に約90cm、短軸が東西に約70cmと長方形で、ローム層を約40cm掘り込んでつくられている。

周縁には、大形の扁平でかつ角のある河原石を利用して配石している。特に東側から南側にかけて目立ち、縦にゆるやかな傾斜をつけてはめこむように組んでいる。さらにそれらの隙間に



第14図 土 塙 実 測 図

小さな石をはめこんで、それを補充している。

中から出土した遺物には、一個体分の大形の變形土器があった。下底面から約12cm上のほぼ中に、横臥した状態で原形の4分の1ほど出土した。その方向は口縁部を北にしていた。

(川崎義雄)

4 出土遺物

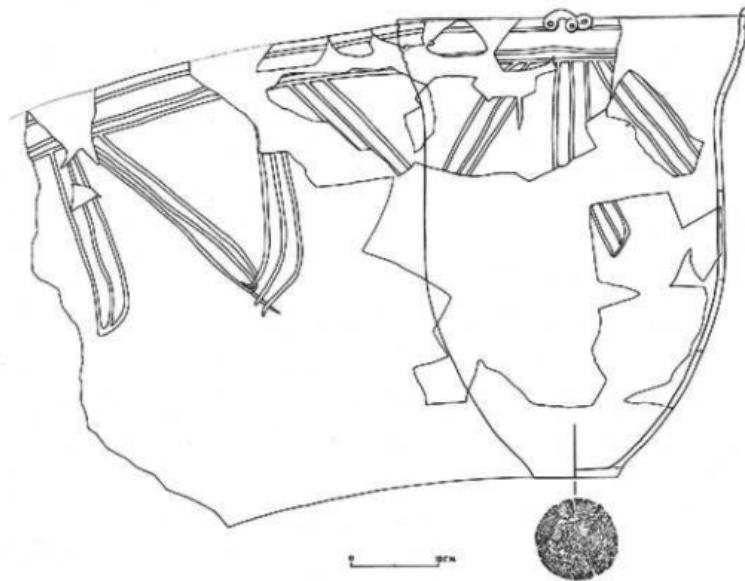
土 器

出土した遺物は、すでに先で述べたように、一個体分の土器に限られていた。そこでその土器を記述してみよう。

高さが約53cmある大形の變形土器で、その現存状態から、文様の展開はしきれない。口縁部には、刺突のある特有な突起が一個残されている。口縁部に沿って三条の沈線が走り、胴部にも三本を対にして、懸垂文が縱走、斜走している。胴部はゆるやかなふくらみをもち、口縁部は外反しながらも、直向している。底部に木葉文が残されている。輪積と稍上手法を利用している。大形の割には極めて薄く、茶褐色をし、器面はよく研磨されている。

後期縄文時代初期の壺之内1式土器に対比できるであろう。

(川崎義雄)



第15図 出土土器

5 ま と め

遺構、遺物について、すでにのべてきたが、ここでその土塙の編年および性格について若干の考察をし、まとめとしたい。

組石内部に長さ約90cm、巾約70cm、深さ約40cmの土塙があり、大きくわけて、組石と土塙とで構成されている。この組石の状態は、西側はかならずしも整然とはいえない（水道管のためらしい）が、それ以外のところは、比較的原位置的な様子をしていた。いずれにせよ、扁平な石をはめこんで縁をつくっていることは事実であった。

土塙内は黒色土が堆積しており、そのほか中に浮いた状態で、一個体分の上器が横倒しで出土した。またその土器の底部に近接して、立石を想定させる縱長の石鉢が横になって発掘された。したがって、この土塙を墓塙と決定づけるにふさわしいものであった。出土した土器から、墓塙も壇之内1式土器の時代の所産であることは疑う余地がない。

時期的にも、ほぼ同じ墓塙として、神奈川県大井町金子台遺跡（神沢勇一 1966）、同県南足柄町馬場遺跡（杉山博久、神沢勇一 1969）、長野県軽井沢町南石堂遺跡（三上次男、上野佳也 1968）などに類例が求められる。しかしそれらの遺跡では、相対的に縱に長くつくられているが、本遺跡では顕著ではなく、むしろ縦と横の長さが人差なかった。そのことは葬法のちがいを意味しているのかも知れない。

しかし、1基だけの比較では、深く追究するには、あまり適当ではない。いずれ明確にしなければならない問題点だと考えている。しいては、集落としての墓塙のあり方を、総合的な観点から追求しなければならない。その点で、われわれに残された今後の課題として示しておきたい。

（川崎義雄）

第6章 おわりに

以上簡単ながら、宮谷白山、宮谷金山の両遺跡の発掘報告をしてきたが、今後の課題として、その方向性をのべておきたい。

白山では中期縄文時代末期（加曾利EⅡ式期）の竪穴住居跡、金山では後期縄文時代初期（堀之内1式期）の墓塚、そして石井徳重氏によって発掘された中期縄文時代初頭（五額ガ台式期）の墓塚と思われる土塚と、それぞれ時代、性格を異にする遺構を確認することができた。

これらのことから、今回の調査では、この宮谷台地が縄文時代中期の初頭から後期初頭にわたって、石器時代人の活動の場として、人々と利用されていた事実が明確にされた。

したがって、時代を同じくする住居、墓塚の相関関係——集落としての、それぞれが果した役割——を時間的流れの中で、把握されなければならないであろう。

しかるに今回の調査も、ここで終るのでなく、その第一歩として前進しなければならない。

今回の調査が円滑に進められた陰には、多くの人たちの御支援があったことをここで報告しなければならないであろう。

発掘、整理を通じて、参加者の多くは、ほとんど未経験であった。それでも連日、学習を重ね、それをカバーできたことが、発掘を大成功にしたことと思う。

それというのも、灼熱炎天下で、労力の限界をのりきって参加し、その中心的役割を果した県立都留高校、市立大月短大付属高校、両校生徒諸兄の活躍があったからである。

それにも増して、地元の人たちの協力、そして発掘なれば、住居跡を復原したらどうかといつて飛びこんできたニュースなどは、よりいっそうの励ましとなった。

また無理な願いや、突然の希望に対しても、快く協力を惜しまなかつた教育委員会や役所関係各位をはじめ、地主そして地域住民の方々に感謝するものである。

今ここに復原事業が実現するにあたって、再び遺跡にたった時、それまでの経過があまりに長くも、また短くも感じた。これも決して発掘者だけの感慨ではないであろう。市民とともに事一にして歩んできた道のりであったからである。

(川崎義雄)

第7章 参考文献

- 仁科 義男 (1935) 「甲斐の先史並原史時代の調査」甲斐志料集成12
- 山梨県中央自動車道考古学調査団 (1966) 「中央自動車道東京・富士吉田線の新設に伴う発掘調査報告書」
- 山本春々雄 (1968) 「山梨県の考古学」
- 藤森 栄一・武藤 雄六 (1964) 「信濃境曾利遺跡調査報告」長野県考古学会誌創刊号
- 神沢 勇一 (1966) 「金子台遺跡の縄文時代墓地」
- 三上 次男・上野 佳也 (1968) 「軽井沢町茂沢南石堂遺跡」
- 杉山 博久・神沢 勇一 (1969) 「馬場遺跡の縄文時代配石遺構」
- 早川 泉 (1969) 「日野市豊田吹上遺跡の調査」考古学ジャーナル第29号
- 小出 義治 (1967) 「原始古代」熱海市史
- 川崎 義雄 (1970) 「原始古代」三鷹市史
- 木下 忠 (1970) 「戸口に胎盤を埋める呪術」考古学ジャーナル第42号
- 埼玉大学考古学研究会 (1970) 「膳棚」鳳翔7
- 仲町遺跡発掘調査団 (1971) 「仲町遺跡」
- 簽口 幸一・大貫 周一・河本 浩吉・二階堂俊三・井上 義弘・佐藤 安平 (1971) 「新羽・大熊土地改良区埋蔵文化財調査報告」昭和45年度横浜市埋蔵文化財調査報告書
- 潮見台遺跡調査会 (1971) 「潮見台」

第8章 発掘に参加して

都留高社会部

私たち都留高校社会部は、7月24日から31日までの8日間、大月市教育委員会によって発掘調査される宮谷遺跡発掘に参加することに決定した。また部員以外からの参加者を募ったところ思いがけず多くの希望者があり、私たちの祖先の残した遺産である遺跡に対し多くの人々が興味をもっていたかということを知らされた。

過去において社会部では他の遺跡の見学は数回行ってきたが直接発掘に参加することは今回の宮谷遺跡が初めてであり、何も知らないことばかりなので発掘が開始される当日まで非常に不安であった。

7月24日の発掘当日、朝学校に一度集合した後、宮谷遺跡の現場において今回発掘の調査員である川崎先生から発掘調査するにあたっての諸々の注意、問題点、発掘することの意義および発掘方法等について話しがあり、いよいよ発掘の開始となった。

発掘の方法はグリッド方式で行なわれ、この方法は発掘地区を2m四方の格子状に区分けてそれらを1カ所おきに掘って行く方法であった。とにかくすべてのことが未知のことであったにせよ始め発掘というものに対して持っていた安易な気持も発掘前の話しによって新たためて考え直さなければならなかった。

発掘区域にグリッドが設定された後、グループに分かれ、私たちは各グリッドに入り、作業を開始した。

発掘地域は畑であるため表土である第1層からの遺物はほとんどみられず全グリッドを見てもわずか数片の土器が出土したのみであった。私たちは、もっとたくさんの土器や石器が出土するものと思っていたにもかかわらずほとんど出土しなかったのがっかりしたものですが、しかし、

表上の1層は耕作のために搅乱されているため遺物の出土が少ないことも説明されて納得することができた。

ともかく出土量が少ないにもかかわらず自分の手で数千年前に使用された土器を手にした時の感激は何んとも言えないものであり、これからも忘れることができないでしょう。

この発掘中に私たちが一番興味を持ったことはほぼ完全な形



で発見された2個の埋められていた土器でした。何故この様な場所に土器が埋められていたのか解りませんでしたがこの様な埋めガメがあることは明らかに住居跡であると説明されたものの私たちにはまだはっきりしませんでした。

また、埋めガメの発見されたグリッドから2つ目のグリッドから、自然石で組まれた長方形をした石囲が発見され

たがこれが住居内に設けられた炉であることが解った。

この炉に隣接して直径1mほどの大きな穴が発見され穴の中から土器片と共に木の実の炭化物が発見されたため恐らく貯蔵穴であろうとのことでしたがどうして貯蔵穴や柱穴が解るのかと思っていたところ、この住居が使用されなくなった後に堆積した土とローム層との色の違いで判断するとのことでしたが私たちにはまだはっきりと解りませんでした。

また、この白山遺跡から南に100mほど下った所にある金山遺跡の一部の発掘も平行して行なわれた。この遺跡の地主の庭から土塙が発見されていたため調査員である重住さんと大月高校生の10名ほどで発掘したのですが土塙とは一体何なのか見当もつきませんでしたが直径1mほどの石組があり、石を取りはずして行くと中から横倒しになった土器が発見され、ここで古代の墓であろうとの説明でしたが現在の墓からは想像も出来ませんでした。この土塙の実測は私たちだけで指示された様に実測したのですが横で見ていた時には簡単に思えたものが実際に実測してみていかに難しかったか解りました。土塙の実測が終って白山の現場にもどってみるとほとんど掘り終っていて5つの柱穴、炉、埋めガメ、コの字形をした周溝とが掘りあげられていてやっと住居跡であることが明確になりました。

測量、写真等の作業をすべて終り、あとは埋めもどすだけになり、その前に住居跡内に今度掘り出す時のために石灰をまいて埋めもどしを行いました。埋めもどしも終って元の平地にもどってしまうと何んとなくさみしい気持になりましたが、この8日間に私たちは多くのことを学ぶことが出来たのです。それは、古代人がいかに自分達の生活を創造してきたのか、人々達の祖先がこの宮谷でどの様に生きてきたのかが解る様な気がします。

そして私たちはこれらの遺跡をただ掘るだけでなく、どの様に守っていかなければならぬかということを実感として受けとらなければならないと思いつつ宮谷を去りました。



あとがき

佐藤威夫

宮谷白山遺跡の発掘と保存の仕事も、ようやく一段落して、報告書が出せることとなった。大月市としては分不相応の仕事であったかも知れないが、とにかく、いろいろな人達の理解、善意と、努力によって今日の成果が得られるにいたったことは欣快に堪えない。

思えば、最初の発見者石井君（かつて私が教職に在った時代の教え子である）が、自分の畠の菜園を深く耕している時に、カチッと当たった土器の発掘の話から始まる。直ぐに私のところに電話があって石井君が自分の車で迎えに来てくれたので現地を視た（それは日記を読むと昭和46年2月28日の事である）。

しかし私の力ではどうすることもできないので、中央の研究者に依頼して、その重要性を確かめてもらうことにし、取り敢えず元の通りに埋めた。そして教育委員会に報告し、文化財審議委員会を開き相談した。やがて宮谷遺跡発掘調査会が組織され、仕事は順調に進んだ。その間の状況はすでに記す通りである。

やがて住居跡復原の話が出、志村市長、小保助役、市議会議員などのみなみならぬ熱意によって予算措置がなされ、現地に竪穴式住居が原始の姿にもどって建ったのは望外の喜びであった。

原始人の住居が、桂川段丘に沿った台地の宮谷・下和田・大島・葛野そして真木・初狩・筍子などと至るところに散在する。これらの人々が、どの位の人数であったのか、どのような生活をしていたのか、そしてそれがどうなってしまったのか、こうしたことは大月市としても、いまだ体系的な調査が行われていない。宮谷の調査を契機として、それらの研究が一段と進められることを期待するものである。

宮谷の縄文時代原始人の集落は、かなり大きかったことが想像される。先年、今よりずっと下方の中央道の工事の際にも、発掘が行われたのであったが、それらを合わせて、かなりの広い範囲に散らばって住居があったものと思われる。もしこれらが全部発掘されて復原されたならば、それはすばらしい景観を呈するだろうなどと、みんなが汗水流して忙がしく働く発掘作業に立ち合いながら、遠かに富士の靈峰を指手し、この宮谷台地、そして同じく扇山山麓に続く下和田方面へ伸びる台地に展開された縄文人の生活を思い浮べ切なるものがあった。

それにしても、今回のこの仕事は、実に、多くの人達の善意の結晶したものであった。発見者にしてその土地所有者の石井君、そしてその一家の人達の熱意、宮谷部落の有志の斡旋、各発掘調査委員の努力、教育委員会の周到な事務処理、何れにもまして、発掘指導者の小林達雄、川崎義雄の両先生、発掘を手伝った都留高生、大月短大付属高生、都留大生などの精魂こめた献身には頭が下るのである。

そもそも文化財というものは、こうして守られていくものであろうか。

(昭和47年6月24日)

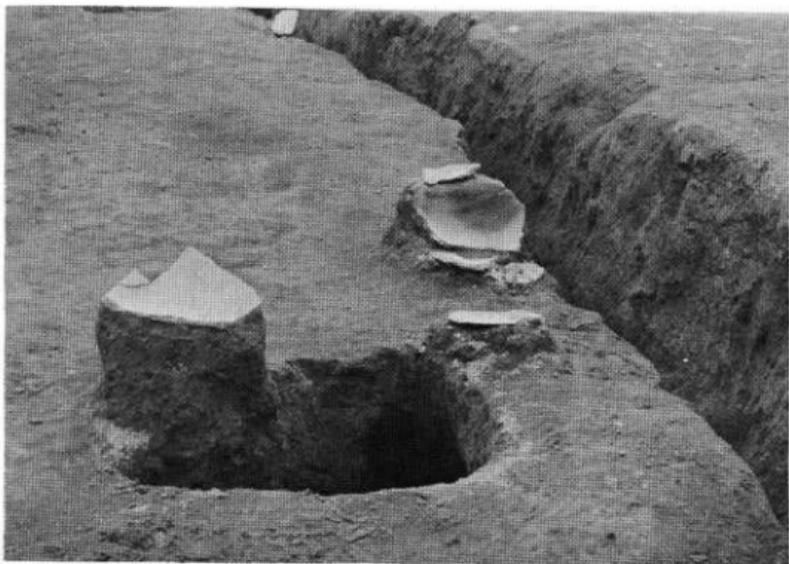


遺跡の遠景

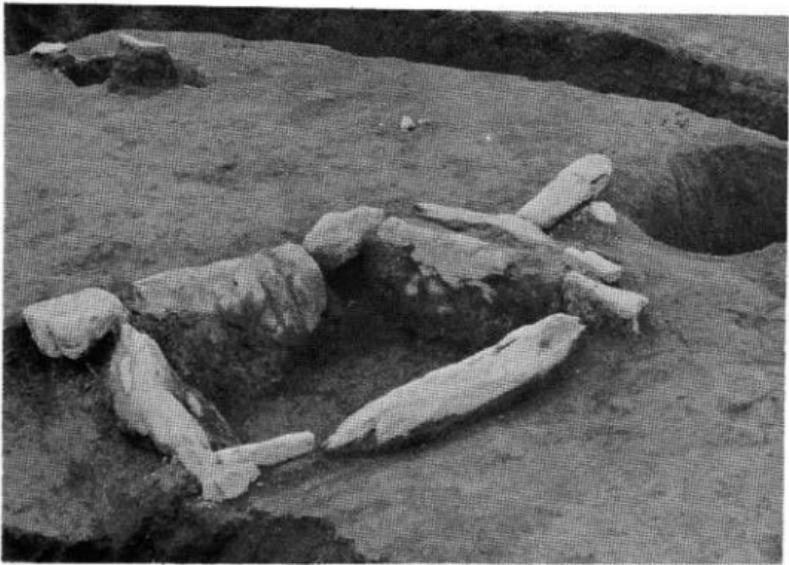


遺跡の近景

図 版 2



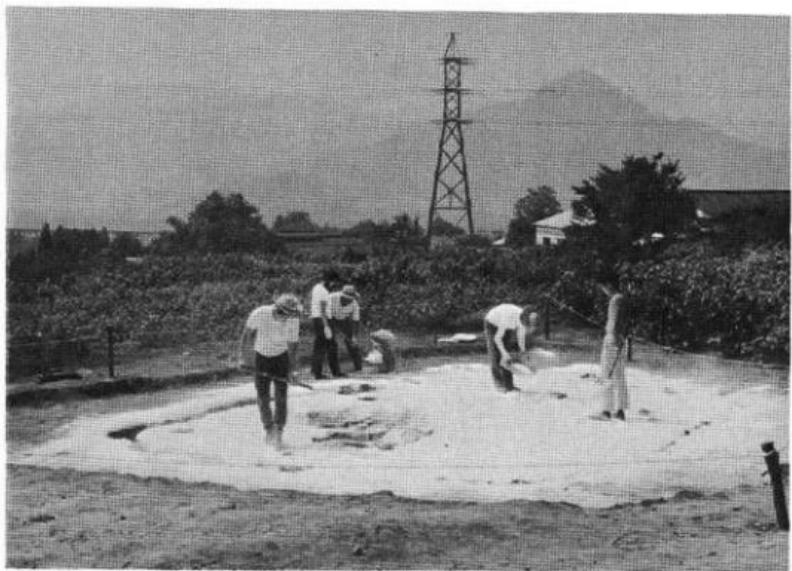
土器の出土状態



石 囲 炉

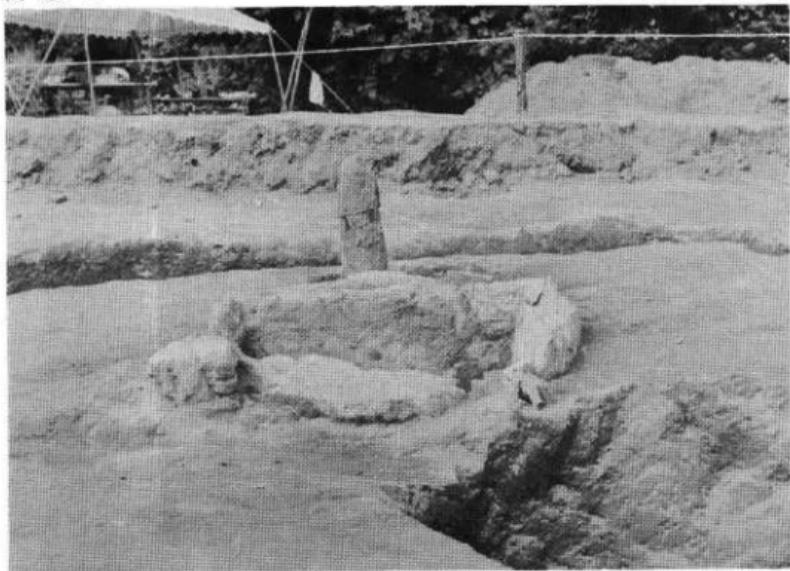


測量風景



うめもどし風景

図版 4



石圓炉と石棒の復元



住居跡全景



宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器(約 $\frac{1}{4}$)とクルミの実(約 $\frac{1}{4}$)

図版 6

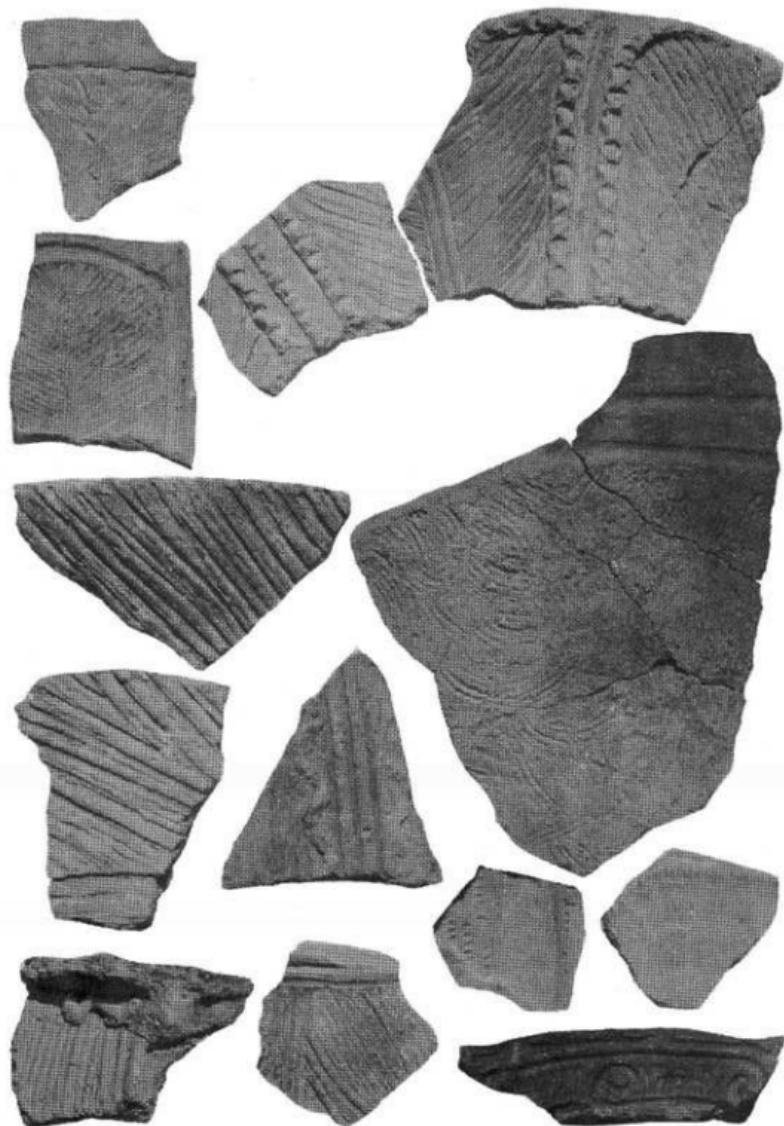


宮谷白山遺跡出土の中野繩文土器(約4)



宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器(約24)

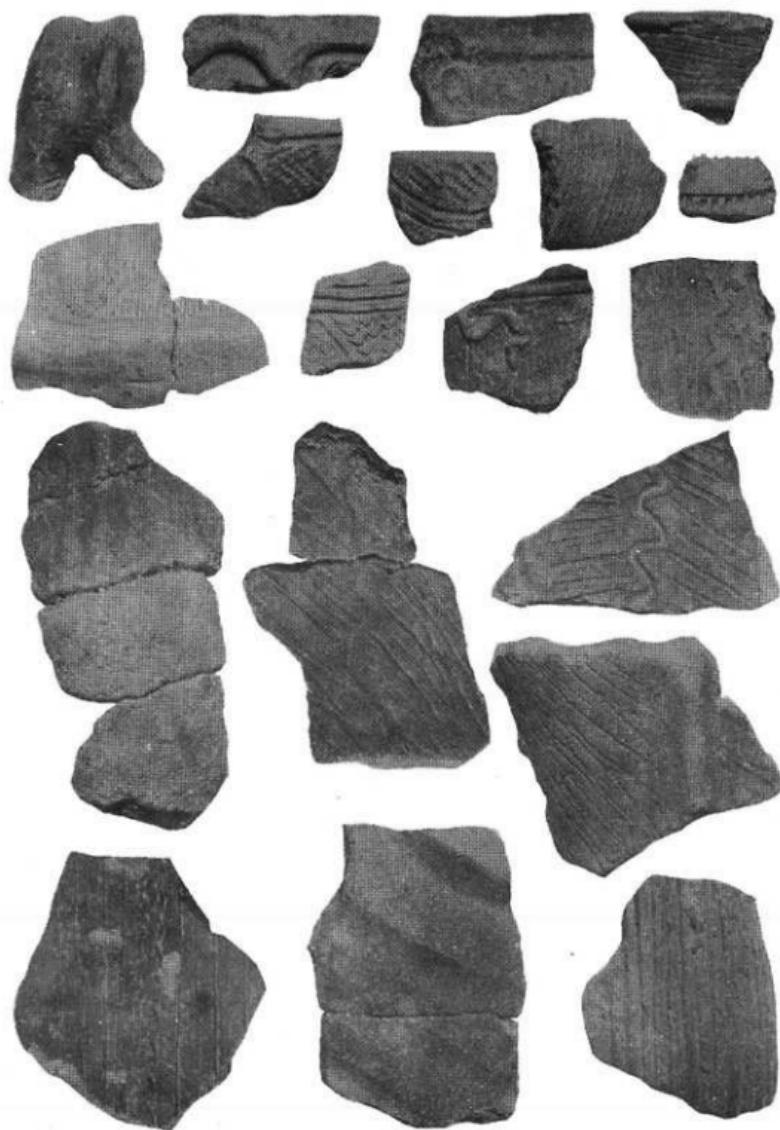
図版 8



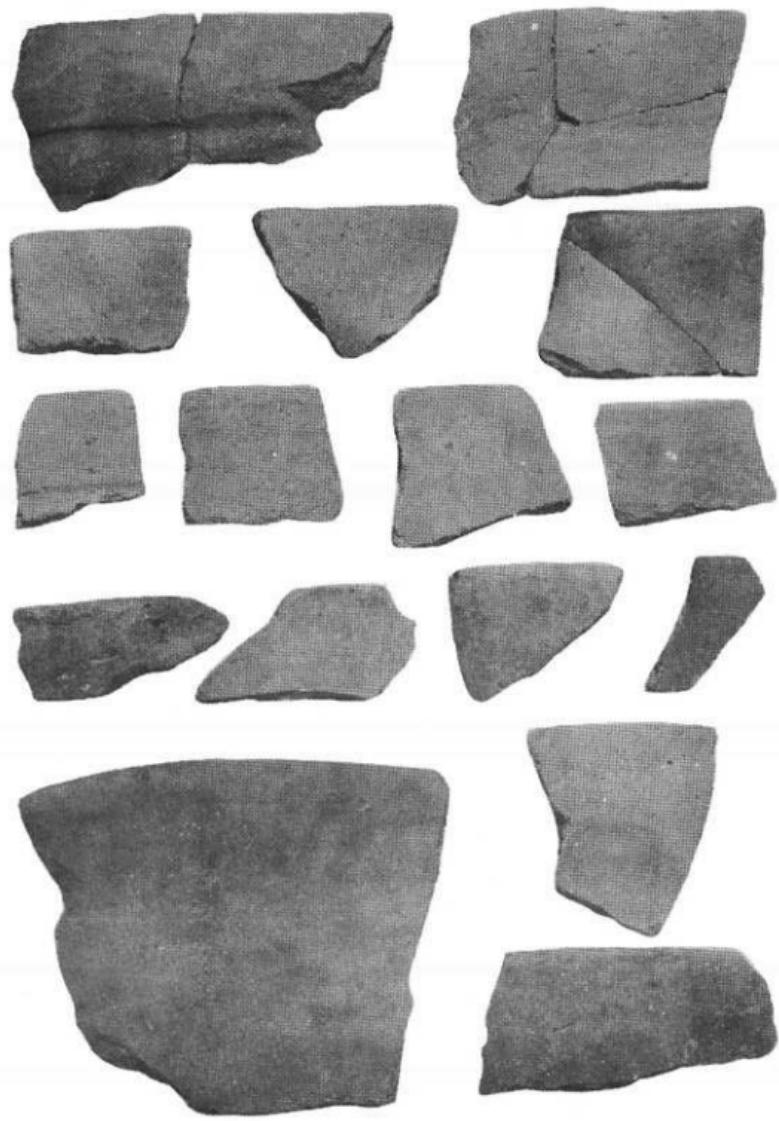
宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器(約2%)



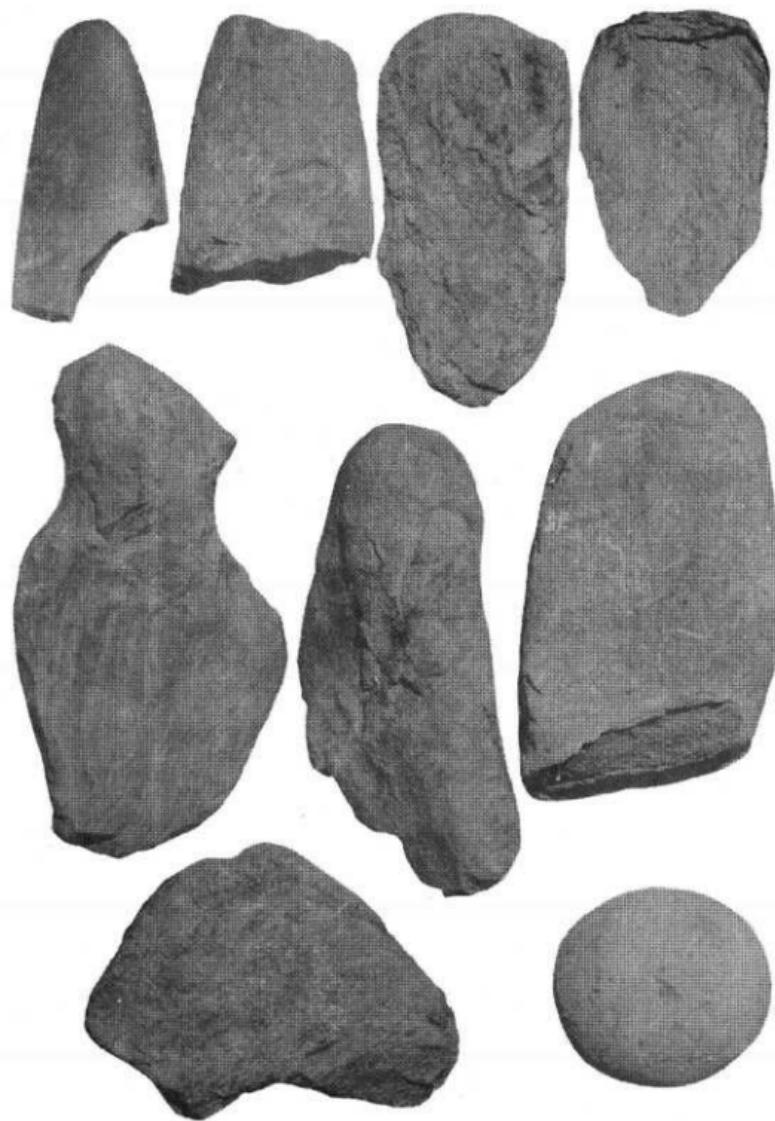
宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器(約4)



宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器(約1/2)



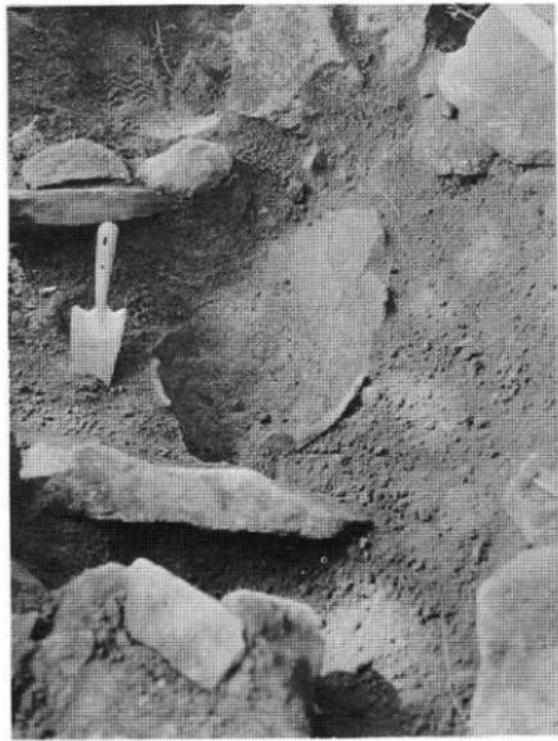
宮谷白山遺跡出土の中期縄文土器(約1/2)



宮谷白山遺跡出土の石器(約2)



宮谷白山遺跡出土の石棒(左一約4寸)・石井徳重氏採集の中期縄文土器(右上一約4寸)
宮谷白山遺跡付近採集の石皿(右下一約4寸)



高谷金山遺跡発掘の墓塚(上段)と上器の出土状態(下段)



宮谷金山遺跡(墓塚)出土の後期縄文土器(約34)



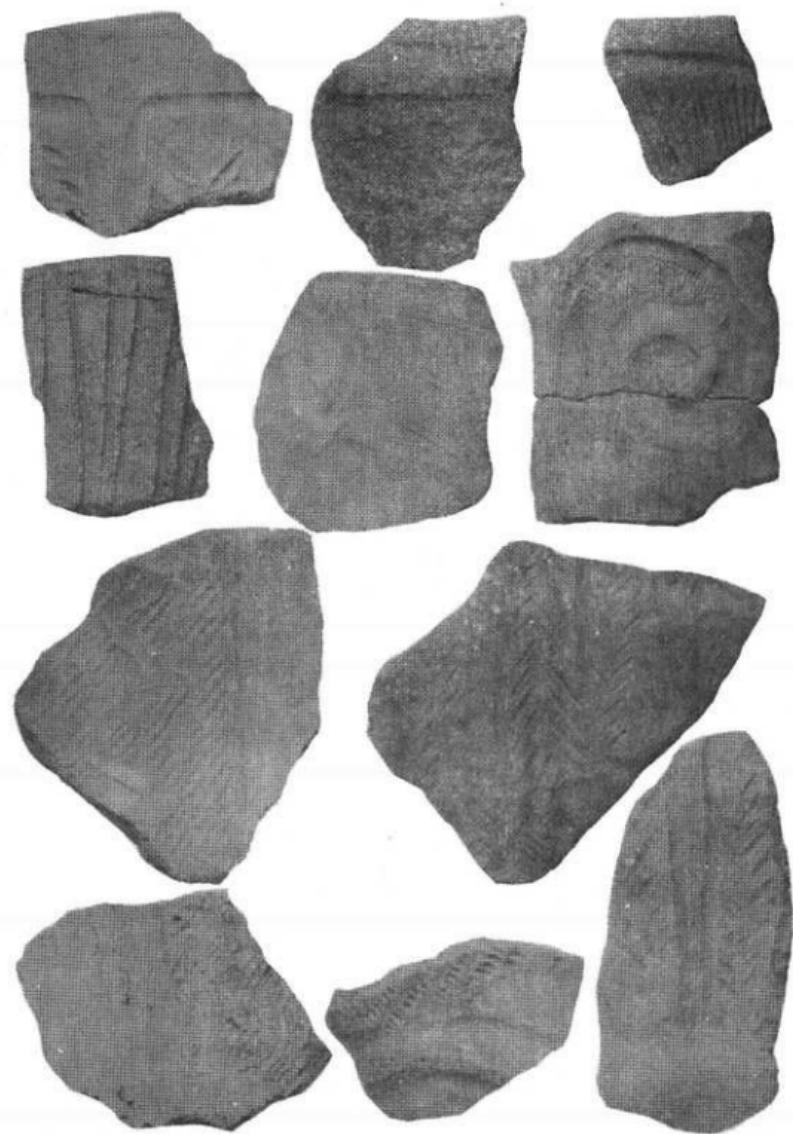
宮谷金山遺跡採集の縄文土器(約2号)一幡野氏所蔵



宮谷金山遺跡採集の縄文土器(約25) —幡野氏所蔵

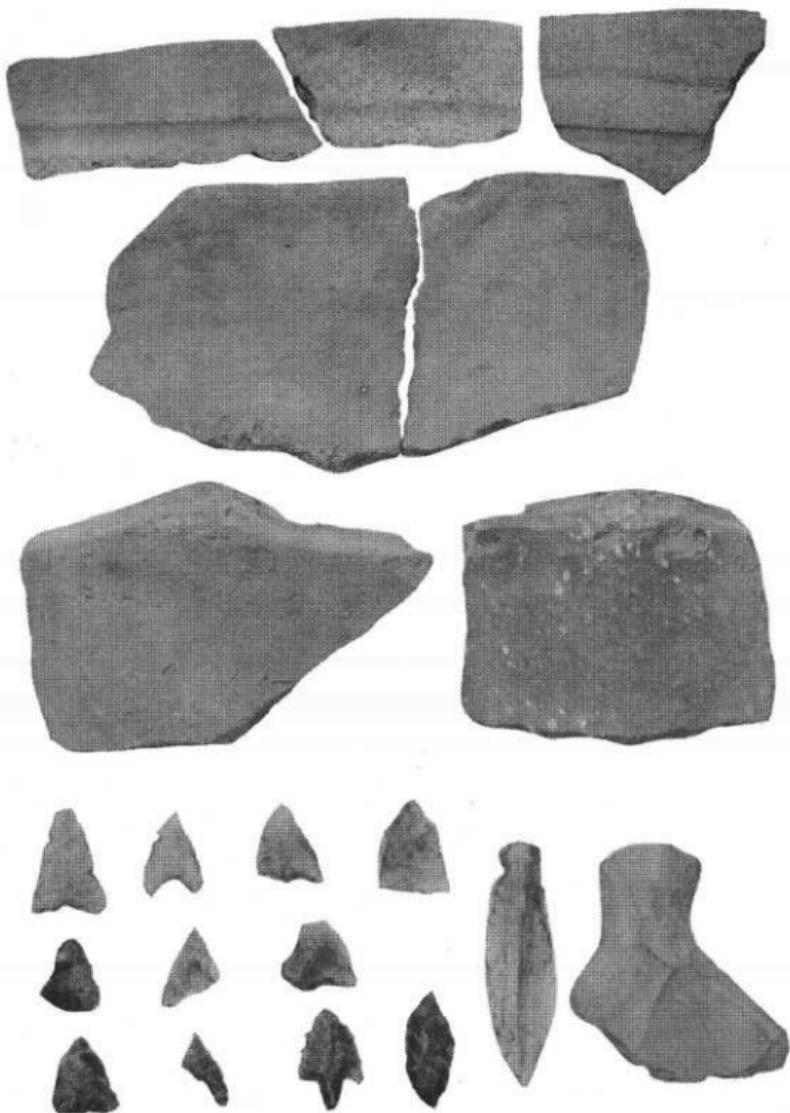


宮谷金山遺跡採集の縄文土器(約1/2) - 輪野氏所蔵

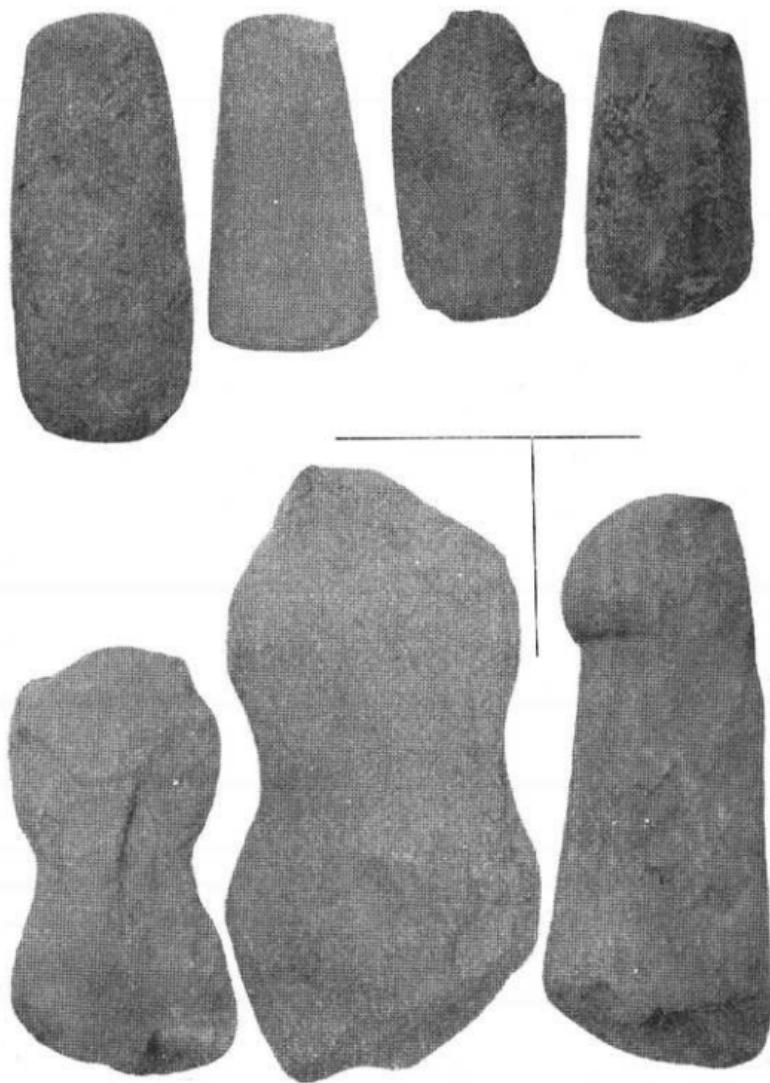


宮谷金山遺跡採集の縄文土器(約2/3)一幡野氏所蔵

図版 20



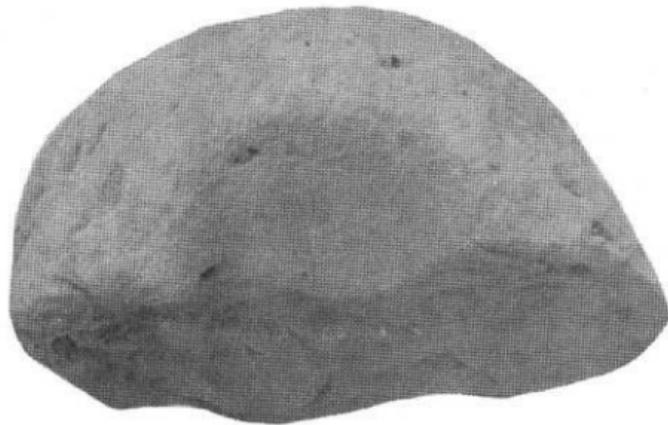
宮谷金山遺跡採集の縄文土器(上段一約2/3)と石器(石鎌、石匙)(下段一約1/4)一輪野氏所蔵



宮谷金山遺跡採集の石器(約少) —幡野氏所蔵
(上段一磨製石斧、下段左2点一打製石斧、下段右一石棒)

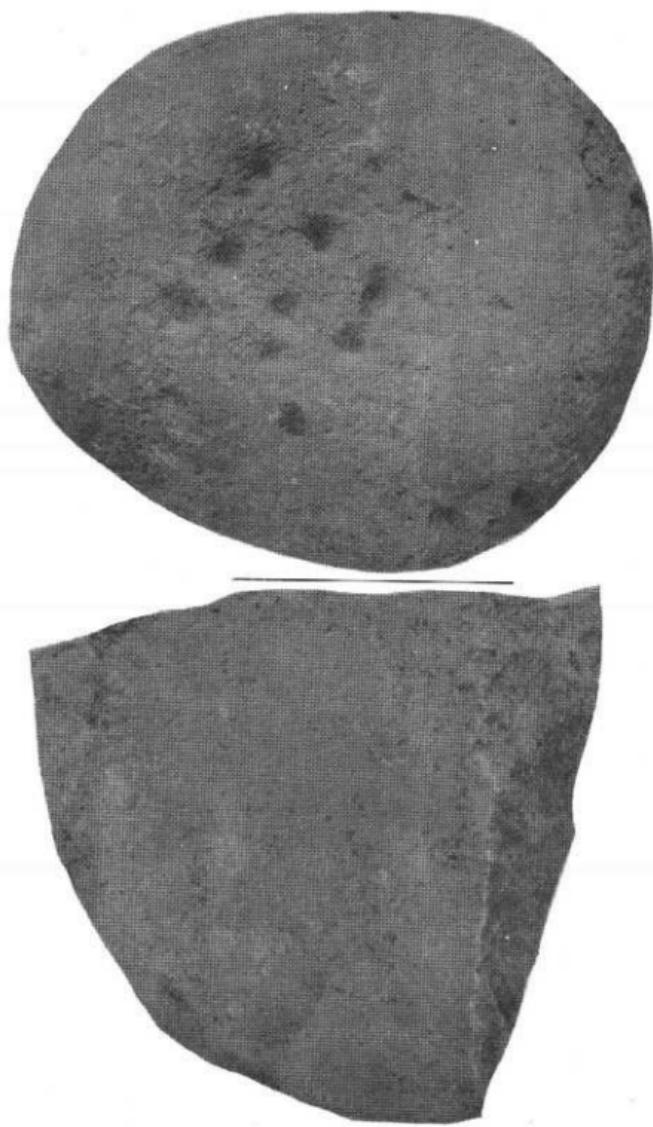


—



宮谷金山遺跡採集の石器(約2%)—幡野氏所蔵

(上段—石皿・下段—石臼)



宮谷金山遺跡採集の石器(約2kg) - 輔野氏所蔵
(上段一凹石・下段一砥石)

参 加 者 名 簿

調査担当者

小林達雄・川崎義雄

調査参加者

重住 豊

都留文化大学 (市川文夫・小田紀文雄)

県立都留高校 (齊藤正利・矢崎勉教諭・天野善次・飯高伸子・小俣孝雄・小坂昇・杉本功・
藤原かずみ・藤本まゆみ・小山田満男・佐藤俊一・山田行輝・天野よし子・
網野美三子・石井よう子・市川京子・小俣三千代・加藤千恵・木田なおみ・
小林統一・佐野千秋・田村たく子)

大月短大付属高校 (岩村一和教諭・石井久子・加藤貞子・柿沢礼子・幡野喜生・宮下正利・
渡辺正)

県立吉田高校 (池田敏雄教諭)

山梨県大月市宮谷遺跡発掘調査報告

発行日 1973年2月25日

著 者 大月市宮谷遺跡発掘調査会

発行者 大月市教育委員会

印 刷 株式会社 文伸印刷所
三島市下連雀4-2-38

